

昭和十一年十月廿五日第三號郵部認可
昭和十一年三月十九日發行
道頓堀 第一百十三號 第十一卷 一月廿九日發行

運轉搖



豊昇堂

豊昇堂

第十一年三月號

亡き名優雁治郎・西鶴・近松よ取り材上る方情緒綿る悲戀物語

お夏清十郎

— 西鶴五女人の内 —

松竹京都撮影所
春季特作豪華華篇

清十郎
林長二郎

主演

お夏
田中絹代

松竹キネマ
長二
林
松竹キネマ
長二
林

林敏夫
志賀靖郎

高松錦之助
坪井清江

明井清江
摩耶みるめ

河村黎吉
大船より
突貫小僧

松竹プロツク
松竹プロツク
未曾有の豪華
キヤスト
総動員

長二郎第一回作品の監督者
犬塚稔
脚色監督

木谷千種女史考證
伊藤武夫撮影



陽春封切

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

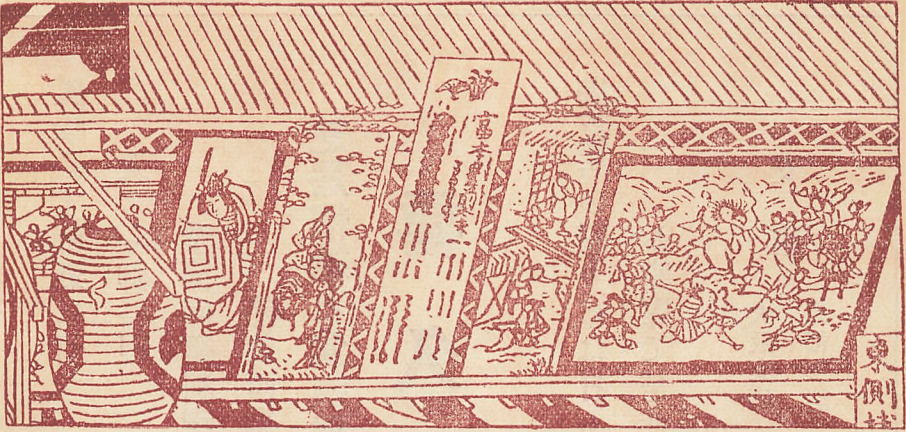
御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を!

支店

- 大阪支店
- 京都支店
- 心齋橋筋八幡筋角
- 北新地裏町
- 木屋町ドングリ橋





◇道頓堀・第十一年・三月號第百十四輯◇

★繪口★

○歌舞伎座・髮結新三・菊五郎・安部保名・菊五郎・坂崎出羽守・菊五郎「三社祭」善玉
 ・三津五郎・悪玉・菊五郎○中座「國芳の出世」國芳・壽三郎「己が罪」作兵衛井上○神
 戶松竹劇場・河内山宗俊・左團次「長脇差試合」三ツ股の淺太郎・猿之助○角座・雪
 割草・刑事堂本・都築・登喜子の父・中田・登喜子・梅野井○浪花座・大星由良之助・
 長十郎・シーボルト・長十郎・商館長齋右衛門○名古屋御園座・大星由良之助・五郎

◆表
 ◆扉
 紙

五代目菊九郎の保名
 左團次の信長(信長記)

道頓堀春の特轉面・

「坂崎出羽守」について……………山本有三(三)
 「信長記」と「新宿夜話」……………岡本綺堂(五)

劇談 二題・

加筆が惡ければ……………木村錦花(八)
 無鐵砲な忠臣藏……………渥美清太郎(九)

梅雨小袖の話……………高安吸江(二)
 菊五郎の人間描寫……………西田眞三郎(三)
 菊五郎小論……………高谷伸(五)
 井上と壽三郎……………菱田正男(七)



保名禮讚……………西尾福三郎 (一九)

俳優系譜餘録
明治年間に物故した俳優達……………紙魚庵 (三)

連載讀物

私の女房役ご
劇團の變轉 (5)……………都築文男 (三五)

名優あれやこれや譚 (二)……………日比繁次郎 (四三)

寺小屋「松王の型」……………編輯部編 (三九)

ライカ行脚 (青年歌舞伎印象)
祇園館に於ける……………大橋孝一郎 (三三)

「團十郎」と「鷹治郎」 (1)……………山川聽雨 (三四)

默阿彌物解題……………世話垣鈍文 (三七)

女形か女優か……………川上利一郎 (三八)

紅筆餘滴

あの頃のころ……………山口俊雄 (四〇)

旅順の思ひ出……………藤村秀夫 (四〇)

十二時忠臣臧……………中村翫右衛門 (四二)

漫畫……………妹吞平三

編輯後記……………大槻たもつ

村上勝 (四四)

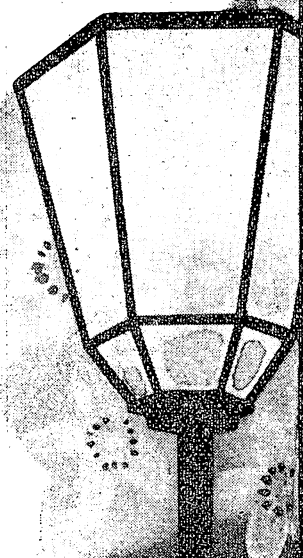
天下之銘酒

シ
ラ
ユ
キ

白雪

根津伊丹灘

小西酒造株式会社



郎五菊・三新結髮

◇丈八昔袖小雨梅◇



— 行興月三座伎舞歌 —



郎五菊・名保部安

◇名保◇

安兵衛八十番斬

嵐 寛壽郎

特別出演

松本 田三郎

荒木 芳子

木村 卓夫

大西 三郎

嵐 徳三郎

關 操

下加茂

菊本 久夫

玉島 愛造

春島 清

尾上 紋彌郎

實話
中山安兵衛より

脚色
島影一美郎

監督
益田晴夫

撮影
野村金吾

嵐寛壽郎プロダクション
超特作音響版



新東京撮影所超特級音響版



久松に扮する
久松三津枝

村染に扮する
毛利峯子

お光に扮する
森静子

原作
土方 喬

脚色
藤川 十一郎

監督
木村 恵吾

撮影
原 義勝

野崎小次郎

◇ 坂崎出羽守 ◇

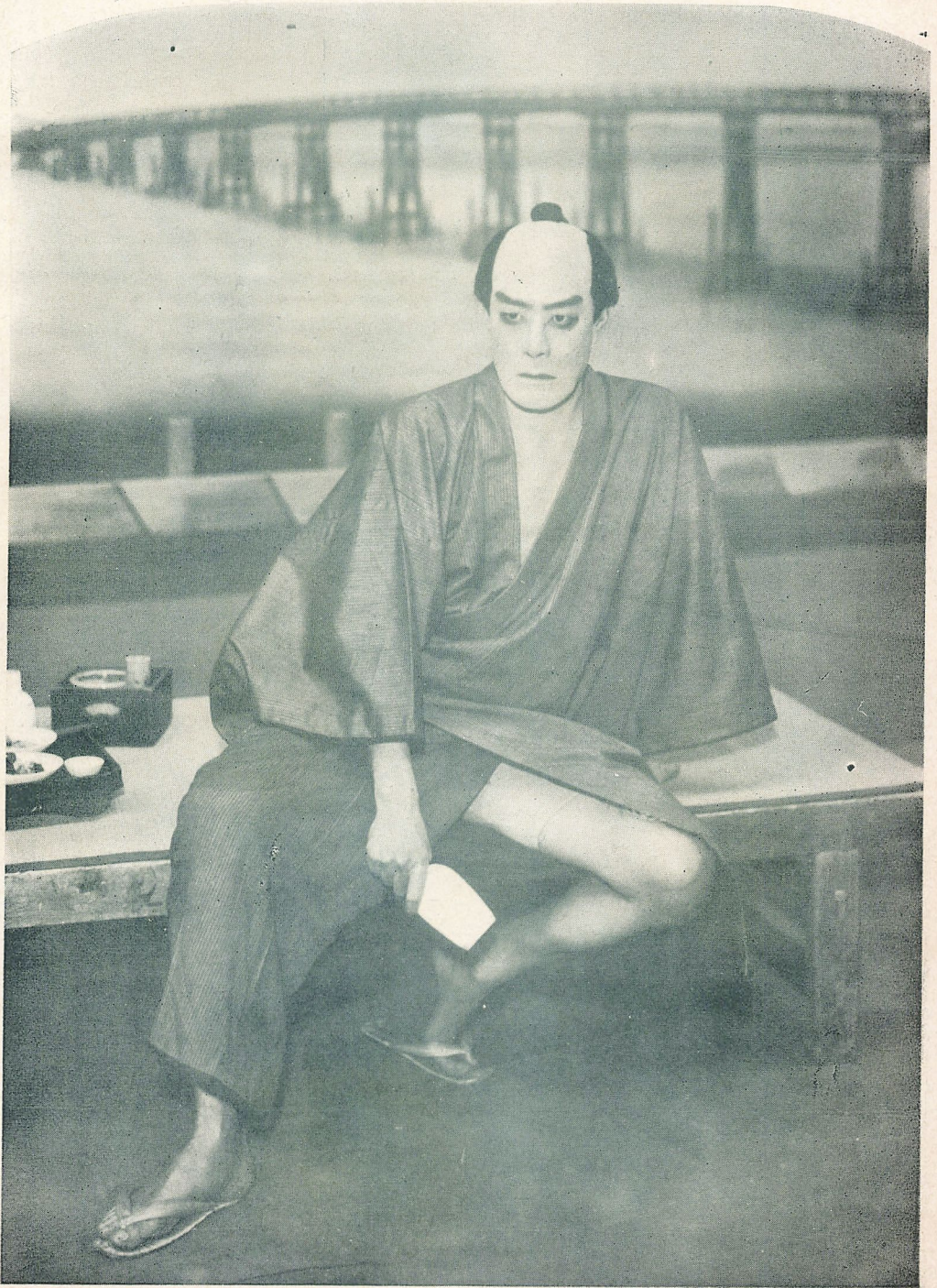
坂崎出羽守・菊五郎



「祭 社 三」

善 玉 三 津 五 郎
惡 玉 菊 五 郎

一 劇 同 合 座 中 一



郎 三 壽 ・ 芳 國 齋 勇 一 「 世 出 の 芳 國 」

— 罪 が 己 ・ 作 表 代 の 派 新 —



— 夫 正 上 井 ・ 衛 兵 作 —

◇場劇竹松戸神のりよ日四十◇



次團左・俊宗山内河

「山内河」



寄り斬るぞ

流行歌

義仁ひらむさ 面B

林泉橋 伊田本 佐英一 齋子郎



主は楽情

流行歌

織娘しぶ 面B

近新虎 腰み ど 實り龍

ドーコレイヘイタ



女王次多

流行歌

漫 爛 春 面B

林橋 伊本 佐一 齋郎 新橋 み喜 代丸

やざ子守唄

流行歌

巾頭こしさ 面B

橋本小 郎花



ドーコレートツ

第十二回新譜

- 管絃樂 **リゴレット** 抜萃曲
- 管絃樂 **女學** 生
- フルトイフエル曲
- 管絃樂 **レハール** 曲
- 管絃樂 **金と銀**
- 管絃樂 **カバ** 影島
- 管絃樂 **歩道** のり
- 管絃樂 **タンゴ** 影島
- 管絃樂 **銀** 影島
- 管絃樂 **みんな** 昔の事
- 管絃樂 **フアン** リヨサス
- 管絃樂 **アルゼンチン** タンゴバンド
- 管絃樂 **映画** はたかの女王 主題歌
- 管絃樂 **ファイファイ** 又の唄
- 管絃樂 **口には** 出さぬが
- 管絃樂 **レオン** テールテール
- 管絃樂 **アルバド** パール楽園
- 管絃樂 **歌手** マルタン



ドーコレルタスリク

大日本蓄音器株式会社

金鷄印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ
い



洋酒・飲料水・罐詰

株式會社 横山商店

大阪東區豊後町三



◇ 劇派新西關の演續に月三々堂 ◇



男 文 築 都 本 堂 事 刑
造 正 田 野 中 …… 父 の 子 喜 登
男 秀 井 梅 …… 子 喜 登

「草 割 雪」

躍進の前進座
浪花三日月公演

「二十時忠臣蔵」

大由良之助——長十郎



「シボルトル夜話」

シボルトル…長十郎
商館長…翫右衛門



月刊・演劇雑誌・雑誌

演劇類編

第十年

三月號

第四百四輯



「信長記」

市川左衛門の織田信長

「坂崎出羽守」について

山本有三

六代目によつて出羽守が上演されるのはこれで六度目です。東京で三回、大阪でも三回目の筈です。もう十六年も前に書いたものですから今更こと新らしく御話するやうな事は何にもありません。殊に最近硝子體內出血を來たしたので醫師から讀書、執筆、對談等を禁ぜられて居りますから折角の御依頼ですが何も書くわけには参りません。以下の話はかつて某紙（讀賣）に話した事ですが出羽守を見る人に何かの参考になればと思つて寫しとらせました。これでよろしかつたら貴紙の隅にでも御再録下さい。

◎ 私六代目のために「出羽守」を書くやうになつたの

は、畏友長田秀雄君が二人の間に立つて斡旋された結果です。當時長田君は市村座の文藝部を主宰してをられたので、同君から再三、菊五郎のために脚本を書いてくれないかと勧められてゐましたが、俳優に填めて書くといふことは一度もやつたことがないだけに、非常に困難であるばかりでなしに、危険であると思つたから、私は容易に承諾しませんでした。ところが、大正十年の二月、であつたと思ひます——吉右衛門が市村座を脱退するといふ最後の興行の時でした。私は久々で市村座を見物に行きました。その時一番目はたしか「八陣守護」で二番目は「魚屋宗五郎」でした。私は六代目の宗五郎を見てゐるうちに、すつかり魅せられてしまひました。何處ま

でが親父の型で、何處からが彼の力量であるか、知りませんが、兎に角親父の型とか、彼の工夫とかいふものを超絶して一個の魚屋宗五郎になり切つてゐる。彼の舞臺を見てゐると、彼は型といふやうなものに拘束される俳優でなくて、泉のやうにもくもくと盛上がり潺溪として自由に道なき道を流るゝ天才的な名優であると思ひました。かういふ俳優こそ新しき脚本を生かして行く人であり、かういふ俳優と同時代に生きてゐるわれゝの幸福を思ひました。それなのに今までこの名優のために脚本を書けと勧められてゐながら、快諾しなかつたなぞは、劇作家としての冥利に盡きるといふやうな氣持にさへなりました。それで一緒に樹で見つてゐた長田君に、その場で『書く』と、きつぱり約束しました。そのあとで長田君に連れられて、樂屋に行きましたが、六代目と會つたのはその時がはじめてです。

ある人が、近松の作品には夏書いたものがかなり多いが、君の戯曲も暑い時に書いたものが多いねと、いはれたことがあります。實際、私のものは、この『出羽守』にしる、『嬰兒殺』にしる暑中に書いたものが非常に多

いのです。近松に夏書いたものが幾つ位あるかそしてそれはどういふ理由からか調べたことがないから知りませんが、あるひは盆興行を當込んで書かされた篇に、夏期の作品が案外多かつたのではないでせうか。私の戯曲が夏に多いのも、別に特殊な理由があつたからではありません。私は震災の年の春まで早稲田に勤めてゐたものですから、學校を休んで戯曲を書くといふわけにもいかなかつたので、苦しくつても創作は大抵暑中休暇の時を利用したものです。そんな譯で私には夏の作品が割に多いのですが、この『出羽守』も夏の眞最中に書いたのです。書いてる間に顔や肩に瘡が出来てひどく困つたことを覚えてゐます。何でも六代目の前ではじめて本讀をした時は、私は顔や肩に一面繻帯をしてゐたので、寺島君は心配して狂言方の人に代つて讀ませてはなぞといつた位です。併し私は自分で讀んだ方が氣持がよかつたので、四幕六場を全部ひとりで讀み通しました。すると寺島君は「山本さん、これはあつしのことを書いたんぢやないかね。出羽守はそつくりあつしだよ」と何度も繰返しいひました。私は當時六代目とは二度會つただけで同君の

ことについては何にも知るところがなかつたのに、はじめて寺島君のために書いた脚本が君の柄に填つたのは自分としては寧ろ意外でした。

すでに本讀の時に、「出羽守はあつしだよ」といつてゐる位だけに、舞臺の上の寺島君はすつかり出羽守になり切つてゐました。其初日の時に、と書には二幕目の幕切れで、千姫と忠刻と列んでゐる姿を瞥見して、出羽守はきつとなる。と、書いてあるのに、六代目の出羽守は二人の姿を見ると、急に花道の切穴に（再演後は舞臺の切穴に）駈込んでしまつたので、稽古の時にはあんなことになつてゐなかつたのに、どうして駈込んでしまつたのかしらと、われ／＼はみんなびつくりしましたが、後で六代目に聞いて見ると、口惜しくつて／＼あの場には立つてゐられなかつたから、急に駈け込んでしまつたのだといふことでした。成る程、あゝいふ場合に遭遇したら、さういふ氣持になるのは尤もだと思つて、六代目の書を無視した演技に少しも不服を感じませんでした。いや、それどころかそれ程までに張切つた演技に私は深く感謝してゐます。

それから大詰の幕切も、私は出羽守に切腹をする仕事を任せなくつても、切腹をするのだといふ氣持さへ分ればいゝと思つて、たゞ切腹の用意をすると思つておいたところ、六代目は脇差を抜いて、ぶつりと腹に突立てゝしまつたので、私はこれにも驚きましたが、併し六代目にする時、もうあゝいふ結果になつた以上は、一分間でも一秒間でも、生きてゐるのが厭だといふのです。彼はと書にかう書いてあつたから、さうやるといふやうな俳優でなしに、と書にどう書いてあらうとも、それが必然の動きだと思つたら、と書でも何でも無視して、どんな自分のやりたいやうにやつてしまふ俳優です。たゞ自分の仕勝手からや儲けようとするさもしい根性からこんな我儘をやられては閉口ですが、六代目のやうに止むに止まれぬ勢ひから、脚本の指定と違つた演技をやるのだつたら、私はちつともかまひません。むしろこの方が脚本の精神を却つて生かすことになるのですから、私は自分の方で脚本を改めるやうにしてゐます。そんなわけでその初日の時の演技はそのまゝ今度の舞臺にも踏襲されてゐます。

「信長記」と「新宿夜話」

岡本綺堂

兩作ともに屢々繰返されてゐるものですから、作者としては別に新しいお話もありません。

「信長記」は題名の通り、信長の叡山燒討を脚色したもので、大體は史實に據つてゐますから、作者の創意はあまりに見出されないわけです。信長が叡山を燒いたのは山法師等の横暴を憎んだのと、彼等が淺井朝倉に味方したのと、この二つの理由に因るのですが、信長としては寧ろ前者が強く働いてゐたやうです。

戰國時代の武將、たとへば武田信玄、上杉謙信、北條早雲のたぐひは、いづれも意思の強い名將でありながらいづれも信仰心が強く、悪く云へば「佛に倣す」といふべき傾向があつたのですが、其中で信長は敢然として、世の批判をも顧みず、古來何人も手を下し得なかつた山法師に對して徹底的の打撃をあたへたのは、まことに痛快であると思はれます。信長の滅亡を評して、神社佛閣

を破却した應報のやうに云ひ做すのは、後世の佛徒の作爲であつて、神社でも佛閣でも此世に害あるものを破却するのは當然であります。現に今日でも大本教などに對しては、當局の鐵槌が嚴重に下されてゐます。

信長の叡山破却については、徳川時代にも種々の議論がありまして、一般には惡徳のやうに認められてゐますが、その中で彼の中井積善は信長の行爲を是認して、僧徒積惡の自業自得であると論じてゐるのは、流石に大儒の見解であると言ふことができます。

拙作「信長記」もやはり其の見解から出發してゐるものと認めて下されば宜しいので、他に云ふべき事はありません。初演以來、左團次が信長を勤めてゐるのですが、不思議な廻り合せで、その初演は東京でなく、大正七年三月の中座でありました。したがつて、初演の配役には大阪俳優が多く、明智光秀(多見藏)善住坊(延若)權

中納言惟房(右團次)といふ顔觸れでした。

その後、東京でも數回上演され、京都その他でも屢々上演されてゐますが、特に記憶に残つてゐますのは、それが露語に譯されて、昭和二年一月、レニングラードの國立アカデミツタ・ドラマ劇場で上演されたことです。その舞臺面や扮装の寫眞を新聞紙上で見ましたが、山法師の扮装など些つとも日本の舞臺と變らないには感心しました。

「信長記」のお話はこれに留めて、更に「新宿夜話」について少々申し上げますと、これは大正十四年十一月の作で、昭和二年の五月、やはり左團次一座によつて本郷座で初演。幸ひに好評を博しまして、杏花十種の中に編入される事になりました。

これも大體は史實に據つたものでありまして、享保三年(或は四年ともいふ)の頃、四谷大番町に屋敷を持つてゐる四百石の旗本内藤新五左衛門の弟に大八といふ道樂者があつて、常に新宿を遊びあるき、兎角に喧嘩買などをして土地の者に嫌はれてゐたのですが、結局その土地の信濃屋といふ旅籠屋(即ち遊女屋で、こゝらは旅

籠屋の名儀になつてゐるのです)の奉公人等に打擲されさんぐの體になつて屋敷へ歸つて來ると、兄の新五左衛門は非常に立腹して、すぐに大八に腹を切らせてしまつた。昔の武士氣質のまだ残つてゐる兄と、當世風の柔弱に流れた弟と、この對照に其時代の姿が窺はれます。

新五左衛門は弟の首を大目付松平圖書頭の屋敷へ持參して、右の始末につき弟大八は成敗いたした。この上はわたたくしの知行を差上げますから、内藤新宿を永代お取潰しを願ひ奉ると申出でたのです。その願ひは聞き届けられて、新五左衛門の家も潰され、内藤新宿も潰されて仕舞ました。新五左衛門はどうなつたか判りません恐らく親類の屋敷にでも身を寄せて一生を終つたのでせう。

併し一方の新宿は潰れたまゝでは濟みません。それから五十年ほどの後、明和九年に再興を許されて、例の旅籠屋も出來、町家も出來て、昔の繁昌をくり返すことになりました。新五左衛門といふ人は其頃まで生きてゐたか何うだか知りませんが、若し生きてゐて其のありさまを目撃したらば、定めて感慨無量であつたらうと想像されます。一旦取潰された自分の家は再興しないが、新宿

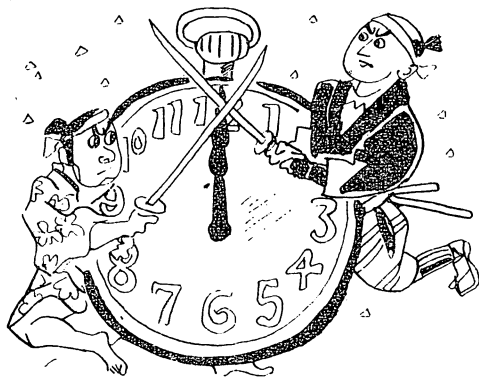
は再興して昔ながらの絃歌の巷となる。武士の意地も、所詮は貧しい人間一個の力に過ぎないもので、時の流れの大きい力に對抗することは出来ない。人間の力の頼りなさに、彼は無限の悲哀を感じたでありませう。

それを思つて、私は内藤新五左衛門の（脚本では齋藤甚五左衛門）を生かして置くことにしました。彼はその後、出家して他國に赴き、何十年振りで江戸へ歸つて來ると、一旦潰された筈の新宿が再興してゐるので、感慨無量で其處を立去ると云ふことに書いてみました。但し彼を一個の老いたる旅僧として點出しただけに留めて置きましたので、多數の観客の中には、前の武士と後の老僧とを別人のやうに見てゐる人もあるやうです。

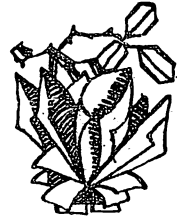
こゝで老僧が自分の過去を語り、併せて現在に對する感慨を述べることにすれば、観客にもよく諒解されるとは思ひますが、それでは何分にも作の調子が低くなるので、旅僧には一切何事をも云はせませんでした。それのために、同人が別人かの疑ひも起るやうになるのですが注意して見て下されば、それが同一人であることは自然に諒解されると思ひます。

忠臣藏打出し

妹 背 平 三



浪花座の前進座「十二時忠臣藏」の看板を見てアワテタのが「面白そうやナ、然しこの忠臣藏は大分長いぞ」「どうして?」「でも十二時忠臣藏」



劇談二題

加筆が悪ければ

木村錦花

松岡映丘畫伯からの傳言で「こんど豊田君が國芳の脚本を書いたから、是非君に見て貰ひたい、而して充分に添削して、上演の出来るやうにして遣つて呉れ、もしこれが上演されるなれば、僕が舞臺裝置を受合つても宜い」と云ふのでした、豊田君は其の以前から度々自宅へも見えられた

し、時々手紙も貰つて居る懇意の間柄で有つたから、早速脚本を讀んで見ると、流石に映丘畫伯が推奨した脚本だけに、これまでに無い處を狙つて居ると、國芳と云ふ異色の人物を捉へた處か面白いので、是は何とか成ると思つたが、如何にも台詞が長たらしいのと、全然結末が附いて居なかつたので、直に豊田君に逢つて話合つてみると、一切お任せするから訂正して呉れと云ふ事でした、そこで甚だ僭越では有つたが、全然台詞をやり變へ、結末をハツキリさせる爲に、大詰一幕を書足した譯でありました、さて出来上つて見ると、却つて加筆した處だけが悪く見えて、原

作を傷けた罪は重く、豊田君にはお氣の毒な思ひをして居ります。そこで主役の國芳であるが今更云ふまでもなく、此の時代の浮世畫師は一種の職人で悪い事こそしなかつたが、常に裏店に住んで居て、宵越しの錢は持たないと云ふ肌合であり、居酒屋へ行つて片脚上げて飲む事も知つて居たし、版元から借た金は倒してしまふ、約束なんか間ちがへるのは普通の事のやうに思つて居たので、畫を書かしては名人であつても、常の行狀は餘り良くなかつたのでありました。左國次君は有名な版畫の蒐集家で、國芳や國貞の性行を能く吞込んで居るから、同優

新劇壇三日月號!

各書店・各座賣店に發賣

・定價一十四錢・

に此の國方は適役だと思つて話をすると、それは面白いね是非僕が演つてみやうと云ふ事となり、恰度帝展の始まつて居る時であつたから、それを當込んで、昭和八年十一月東劇の舞臺へ上せた處が、果して好評であり、帝展の大家連も見物に来て、非常に褒めて居られたやうでありました

こんどは國芳を壽三郎君が勤めると云ふ事で、同優は最も私の好きな人であるから、國芳の性格に就いて、氣の附いた事を二三注意して置きました、無論成功する事と信じて居ります。

もし此の脚本が好評であつたら、豊田君の手柄であり、不評であつたら私の直し方が

悪かつたのであると、然う極めて置いて頂きます。

無鐵砲な忠臣藏

渥美清太郎

中座の忠臣藏が大當りだったので、三月の前進座でも十時をといふ表から御註文の由。しかも一番目に「シーボルト夜話」があつて、二番目に二時間半でといふ話。ヤアヤア〜と驚いた次第である。

小山田庄左衛門の件だけで半はかゝつてしまふ。しかもこれは十八場ある。それもその筈、黽阿彌が近松の會稽山を真似て、討入當日の十二時

を一日の通し狂言、書き卸しの明治四年には、十二三時間かゝつて演出した脚本だ。和製「朝から夜中まで」なのだまたその意圖に従つて、朝の六時から翌朝の六時までを演じなければ面白くもなんともない脚本だ。年度の血汐で鳥眼が癒るといふ、馬鹿々々しい小汐田又之丞の筋だけ除いても十八場、兎に角これだけ演らなければ面白くない。しかもそれが二時間半。平均一場八分と三分の一しかない。これで幕間まで入つてゐるのだ。無鐵砲と云はざるを得ない。無鐵砲でもなんでも、兎に角アレンヂしろといふ注文である。小生も無鐵砲ながら引受けた。無鐵砲なことをや

り通して見ようと思つたからである。さうして、臺本をこしらへあげ、東京で相當の種古をした。そして先づ豫定の時間にまで漕ぎつけた。高田郡三郎の切腹、小山田庄左衛門の變心、お蘭の方が貞操を犠牲にしての苦心、南部坂の別れ、小林平八郎の夢、そして義士の勢揃ひから討入、これだけを二時間半で演ずることにした。改訂者も大變だつた。役者は猶大變だ。更に一層大變なのは大道具のお係本誌を借りてお詫び申して置く。

十八場を二時間半でやつても、面白さには充分自信がある。各場とも一切の無駄を省いて、エツセンスのみを提供

するから、一場々々の興味を減殺しないことは勿論だが、斯うして見ると別に、短時間の間でストリーが急速に進行するといふ興味が生れる。更に數種の筋が急速に交錯する興味が生じる。一幕宛よりも統轄的な興味が新しく生れるそこを覗つて見たのである。

これ又古典をアレンジして、現代の人々に興味を理解させる一種の復活方法だと思ふ。御見物の方々にお願ひしますどうぞこれは十八場に分れてゐる狂言だとは思はず、一場の狂言が十八くさりから成立つてゐると思し召して御覽下さい。全部を一場だと思つて

御覽下さい。事實、黙阿彌の原作からして、纏めて見なければ生きない脚本である。切離しては死んでしまふ戯曲である。だから私は丸ごと引ツくるめて、思ひ切てグイ／＼壓搾したのである。十二時二十四時間を二時間半に壓搾したのである。その間にチヨボ

も三場入る。常磐津の踊りも入る。獨吟の場もある。切腹の場もある。幕外もある。そして討入の大立廻りもある。一本の串へ變つた種を十八刺して煮込んだおでんだと思つて味はつて戴けばいい。このおでん、おつゆになる俳優が旨いダシを持つてゐるので、相當に食へるだらうと思ふ。

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品
國產金鶴印

ウキスデキ
キムラツト
ベユモラツト
キバール
ベユミラソ
ジバール
滋養葡萄酒



元 山 商 店
發 賣 元
株式會社 横山

大阪市東豊後町三番地

電話東(94) 二〇一三 四六四九

梅雨小袖の話

高安吸江

梅雨小袖昔八丈は三代目春錦亭柳橋が得意であつた人情噺の白子屋お熊を、河竹黙阿彌が五代日菊五郎へはめて書卸ろしたものです。

柳橋はもと瀧川鯉かん（三升亭小勝門人）の門人で始め鯉之助後に鯉橋と云つたのが、二代目柳橋の弟子となつて桃流と名のり、嘉永五年に三代目柳橋をつぎ後に柳兒と云つた人で、初代の麗々亭柳橋は人情噺の元祖だと云はれてゐます。名高いお駒才三、戀娘昔八丈は江戸淨瑠璃ですが、院本の常套であるやうに此淫蕩で放縱な姦婦の行爲を強いて道理

附けやうとするため却つて反感をさへ唆りますが、梅雨小袖の方は享保時代の出来事とはいへ、頼廢期の江戸市井の人を平明、率直に描いてあるので、そうした不快を感じないばかりでなく、名作者や名優の巧緻な演出で一層立派な世話狂言として歓迎されるのです。

初演は明治六年六月の中村座で菊五郎の新三の外に仲藏の源七と家主長兵衛、半四郎のお熊です。下剋奴勝をやつた梅五郎といふのが後年此家主や彌囃安、さては按摩の丈賀などで天下一の大名人と稱せられた尾上松助の事です。

此狂言が非常に好評だつたので同十年八月の新當座で二度の晴着昔八丈といふ名題で再演せられ、

土川芝居の虫干に取出したる古物も新三、お熊に彌太五郎源七、家主夫婦、下剋まで以前にかはらぬ本場もの、垢によごれし入梅小袖を洗張せず縫直さす。

とあるやうに役割は全部初演時其まゝで此亦好評でした。

此仲藏といふのは有名な手前味噌などいふ隨筆をかいた人で、舞踊家の十一世志賀山せい女を實母に持つたが、眞實な名優です。幼い頃鯉口とか夜着の袖とか絆ませられたとけに美男ではなかつたが、實惡としての名人だつたさうです。四世仲藏をついだ勘五郎の談話に、五世菊五郎のお尻を指でつゝいて「拙い／＼」とよく云つたとありますが、それ程度

肉な恐い爺さんでした。

三回目は明治廿六年で此時から家主を松助が演りました。四回目は卅年、此れで五代目の新三はお終ひ、次の四十年と大正四年とこう二回で松助の家主も終演です。

三幕の中での眼目は、云ふまでもなく富吉町の新三丙の場ですが、私共に殊に好もしく思はれるのは、上手の板塀の前に縁日もの、植木鉢を幾つも雛段に並べたある佗住居、時鳥笛、松魚賣といふ段取り、目に青葉山ほととぎす初鰹の句に見える清新な季節感を満喫することが出来るそれがまた小意気な江戸ッ兒気分と共通する或ももの感じさせる點です。

その初松魚が更に此場の山であるユーモアな空気を造る原動力として働いたのですから彌々痛快ではありませんか。彌太五郎源七といふ二ツ名の親分が髮結風情の青二才に、物の見事に脊負投を喰はさ

れる。「生れは上總の木更津」かどこかは知らぬが「からだへきすの入墨新三」は流石に豪勢なものだ、ヤレコチの音羽屋と聲をかけるあとから、ヌツト出た家主長兵衛「纏は片身貰つて行く」と、片身どころか卅兩の半分、それに滞納家賃の二兩天引、さて／＼上には上のある因業家主の慾の皮と人々感心の程もあらせ、大家の留守に泥棒が這入つたとの報らせ、イヤモウ浮世はめぐる小車のとは實際此ことであります。

十五兩と鰹の片身をせしめた家主は、貯めた簞笥の着類約四十兩がとこ失敬されて廿五兩の損、新三の方は十五兩から二兩取られて残り十三兩、しかし外に鰹の片身と次の幕の閻魔堂橋で己の命まで取られる。それより始めに源七から十兩取つて済しておけば双方丸く納まるものを、江戸ッ兒は實際勘定を無視し過ぎます。

五代目の新三を、残念ながら私は見ませんでした。此人に書おろした役ですから無論結構なものに相違ありません。但しあの意気な姿、優しくて美しい愛嬌のあるあの眼を見れば、浮氣もの、お熊は泣く處がニヤケた忠七を忘れて牛を馬に乗り換えるかも知れぬと思はれないこともありません。そこへ行くと六代目です。あの太々しい強さ、ガツしりした凄味、そこにこうしたいづらをする入墨者らしい柄をより多く備へてをります。斷つておきますが、そんなのを男性的としてお熊が惚れぬといふわけではありませんが、とにかく質感といふ點からはお父さんより今度の方が勝れてゐるかも知れません。

唯一ツ遺憾な點は仲藏や松助級の助演がない事、仲藏程の人が演る源七を追返へすといふ處に妙味もあり、又それ程の家主だから新三も閉口するので、五代

目に仲藏、六代目に松助なら丁度適材適所です。此れは腕の巧拙の外に柄や貫祿が必要で源七はとにかく、此家主に眞向きの人は目下の處一寸見當らぬやうに思はれます。

それらはとにかくとして、我々が此れまで渴望しながら得られなかつた六代目の純江戸世話ものがやつと道頓堀へ出されることになつたのは好劇家にとつて洵に喜ばしい次第であります。

菊五郎の人間描寫

—坂崎出羽守初演時代を顧る—

西田眞三郎

菊五郎の踊りを見てゐると何となく伸び／＼とした感じがします。暢達な踊りとても言ふのでせうか、よどみなく流れて行く春の川の水……とでは形容になりませんが、ある一つの格に入り切れないで、おのづと外に盛り上つて溶けて流れてゆくものがあるやうです。

菊五郎の藝が所謂型物よりも二番目も

の、寫實の勝つた世話物などに倣つてゐるといふ所には、やはり格を守らうとしない破格的な表現力があるのではないかと思ひます。

今度の「髮結新三」などは菊五郎のものでして定評があるのは踊り同様ですが新作物の場合にも型にはまらない暢達な演技が大いに役立つてゐます。昨年十二

月大阪歌舞伎座で上演された「巷談宵宮雨」の龍達に示されたものは、矢張り彼のリアリズムです。勿論あの作は南北の悪趣味をとり入れた怪談ものであつてあの幽霊の部分は寫實とは言へませんが、兎に角龍達といふ坊主に盛られた人間味舞臺上の人間描寫は、同じ菊五郎の演ずる型物には見られないものがあります。

今度久しぶりて上演される山本有三氏の「坂崎出羽守」も亦その意味で大いに菊五郎に期待されるものゝ一つでせう。

「坂崎出羽守」は山本氏が大正十年九月雑誌「新小説」に發表と同時に菊五郎が市村座に上演したもので、大阪ではその翌年六月の中座で上演されて居ます。當時の配役は菊五郎の出羽守の外、友右衛門が三宅物兵衛と家康、魁車が本多平八郎、多見藏が崇傳、榮三郎が千姫を演つて居ました。

新劇風な新作物が盛んに歌舞伎俳優に

依つて演じられて居た頃で大阪の見物も新作物には餘程馴れて居た筈ですが、當時私達の聞いた一般観客の菊五郎の「坂崎出羽守」に對する批評は、同時に上演された豪右な「鏡獅子」に對するものと全然反對で、場當りを避けた淡々とした自然な寫實風な藝は大體に於てこそよくは受け容れなかつたと記憶してゐます。「出羽守」ばかりではなく得意の二番目「め組の喧嘩」の辰五郎でさへも、「何や、しようむない」で片づけやうとしたものです。熱狂裡に迎へられたのは踊りだけで、菊五郎は四日目とか五日目に踊りの出しものだけを取替へて上演しました。

時代は移りました。最近の菊五郎は大阪の好劇齋に喰ひ込んで來ました。今度は「坂崎出羽守」も前回の不遇を嘆くこともありませうまい。中座の舞臺とは違つて歌舞伎座が持つ機帯がこの劇の舞臺裝置に働かけ豪華な大舞臺を構成するだらうと思ひます。序幕の茶臼山の家康の本陣の場面の落城の舞臺面や大詰の出羽守の居間の場の遠見にそびえる本郷臺を行く千姫輿入の行列の夥しい松明の効果は殊に期待出来るでせう。

大盃をぐつと一息に飲み干して盃を捨てた出羽守が嫁入の行列の灯がしづく／＼と坂を登つて行くのを無言のまゝぢつと見てゐたが突然長押の槍をとり鞘を拂つて外へ駆け出して行く、近侍がその後を追ふと舞臺が暫く空虚となりやがて行列の灯が慌しく亂れて、出羽守の斬込を暗示するあたりは劇中息詰るやうな場面です。

菊五郎、友右衛門らの演技と共にその舞臺上の効果にも一しは努力が拂はれることとせしやう。

最も出羽守の性格描寫的な演技は二幕目の船中の場で、本多平八郎といふ色敵が現はれてから、出羽守が千姫の歡心を得やうとして魚釣りをやつたり、白鳥を射たりするが事毎に侮辱される。最後に劍道試合をやつて漸く鬱憤をはらせたが千姫は傷ついた平八郎をいたはつて船の方へ行つて了ふ。出羽守の得意の色は褪せて暗い不安に襲はれる。このあたりの心理的な、肚藝になると菊五郎はぢつと観客の同情心を惹きつけて置いてゐながら所謂お芝居をしないやうです。内心の無念さを表現するために在來の型物には目を怒らせたり拳を握つたりするのでせうが、菊五郎の演出は極めて自然に運んで行き、幕切れに袖の方に睦しく語り合つてゐるらしい千姫と平八郎を見て初め

て無念の動作をはずきり表して見せるといふ手法でした。つまり斯ういふ素で行くやうな表現法が大阪初演の時はあつてなく感じられたらしいのでせう。

何にしても武骨な出羽守がその反面に女に心亂れて心弱い人間を見せるといふ點にも興味があります。

菊五郎小論

高谷伸

明治期に於ける江戸生世話物の名手五代目菊五郎逝きて三十餘年その衣鉢を繼いだ六代目菊五郎が巧緻な寫實的演技を自由に驅使して先代譲りの世話物のみならず昭和期の世話狂言に特殊のうまさを示してゐることは既に定評がある上に舞踊家として日本一の折紙をつけられてゐる。

分を本質的に把握してゐる所にある。舞踊は芝居と違つて寫實が説明に流れてはいけない。部分的な寫實を超えて總體的な寫意であらねばならぬ。菊五郎はこの點をよく理解して古典に新しい生命の注入を計つて成功してきたのである。その一例が「保名」である。保名は筐の小袖を身に持つて人を戀ふ「小袖物狂」といふ古典の一形式に春の野の騷蕩たる情景を配した舞踊である。菊五郎はこれ

を表はす時、古人のかたちのよさの上に物思ふ心を深く掘りさげた上に、榮種咲く春の野に蝶の舞ふのどかさを忘れないで、舞臺一面に陽炎のたつ風情を現はすのである。

保名に限らない道成寺でも鏡獅子でも古人の規格以外に自分の「こころ」を踊るの中に盛り込んで行く人である。

三津五郎の踊の巧さも今さらいふまでもないが、三津五郎は先人の規格を守つて一步も崩さぬ程のかつきりした踊でそれは萬人の規範とすべき踊であるが、それは典型的な保守派の模範であつて、菊五郎のはそれを更らに進めて行かうとする名人藝である。手本とするなら三津五郎、鑑賞するなら菊五郎といふところ、菊五郎の踊は彼自らのもののである。それに菊五郎には清元の場合は延壽太夫の地と相俟つて渾然とした妙味を發揮する。延壽の清元も亦延壽獨特のもので

ある。

また長唄の場合は松永和風のたくまぬうちにふつくりした江戸長唄のうまみが菊五郎の踊りとよく融けあつて特殊の雰囲気醸し出すのである。

菊五郎のうまさに延壽なり和風なりの洗練された藝が加はつて完璧の感がある。たと延壽の清元は完成しきつたものであるから既にできたものを観る場合、絶品の推賞に吝かなものではないが、古典にも新生命をふきこむ菊五郎だけに一歩進めて先人以外に新らしい舞踊の創作をいつも望ましく思ふものである。

和風の長唄には三味線の柏伊三郎がある、伊三郎は年齒未だ四十に充たず、よくあれだけの糸を自由に駆使するばかりでなく、邦楽理論に通じ古典の研究に達せるばかりでなく洋楽に理解があり作曲上多分手腕を有する人である。この人が邦楽部長として在るのだから既成舞踊以外、菊五郎、伊三郎の結合による新作

を期待するものは筆者ばかりではあるまい。

菊五郎によつて創作された舞踊といへば「身替座彈」「棒しばり」「太刀盗人」などがあるがいづれも大正期の所産で狂言種のもので菊五郎の才能としてはあまりに樂々としたものであり手に入りきつてゐる。昭和期に入つて「高杯」がある。これは柏伊三郎の作曲で多分に新味を盛り込んでゐるが、これも狂言種のものである。

菊五郎の藝の範圍はもつと廣く深い。かうした單純な興味以外にまだまだ開拓の餘地がある。

興行上の萬全を期する會社が既成舞踊を順次繰返すことによつて安全な觀客を吸収する方針は諒解できるが、名人菊五郎を信頼する上に於てはさらに飛躍せしむべき機會は今だと思ふ。

「式三番叟」「船辨慶」のやうな本行物も關西で既に演ぜられたし「羽子の禿」や

「うかれ坊主」のやうな艶麗と輕妙を對照させるものも觀賞できた。次期の關西公演には、いや敢て關西に限らない菊五郎の次の飛躍は菊五郎の創作による新舞踊であらねばならない。

新舞踊といふのは歐米模倣の形體的の新らしきではない、形式も内容も純日本的であつて、しかも從來の作でない菊五郎の考案によつて完成された目先きの變つた日本獨特の踊の意味である。

菊五郎時代を示すに足る洗練しきつた彼の生む舞踊の意味である。

菊五郎の手腕と頭腦それはきつと特殊な味と氣分を生み出して我等の信頼を如實に現はすであらうことを確信するものである。

前號「お富と興三郎」稿中嘉永三年とあるは六年の誤植。二番狂言は二番目狂言の誤りで訂正致します。(記者)

讀んだ、苦闘の生活、今日の井上を築きあげるまでの一通りでない辛勞もよく判る、それだけに充分酸ひも甘いもよく噛みわけた人となつてゐる、最近の一例をいへば、過日京都で、氏の門下でこんど關西新派から井上の許へ復歸した山口俊雄君と三人で飯を食つた時の話で、氏は「山口君は寫眞や何かで、賣り出さうとする舞妓なんかではもうないのだ、一人前の藝妓なのだ、だからこれからはウンと名を賣つて、いゝ客を見つけて高い枕金を取るんですなア」と大笑ひしたことがあつた、謹厳で通る井上氏としては珍らしい色つばい、しかもユーモアたつぷりな賢で、この道で相當？な山口君も頭を搔いて感謝苦笑してゐた、こうした朗らかな光景は、更に同じ京都の東洋亭における山口君の友人、書籍會館主の吉田文治氏發起の座談會の時にもあつた、その時集まつた數十名の人々の前で、愛弟

子山口君を鞭撻激勵したあとで「これらの役者はウンと本を讀まねばいけない自分らももう老朽だから讀むといつてもどうにもならないが、山口君などはウンと讀まねばならない、どうか皆さん、山口君に本を讀ませるやうにしてやつて下さい」といつた師としての慈愛に籠る言葉があり、並居る人々は目頭を熱うした誰かの半疊に「山口君には吉田君がついてゐます、だから本のごことは大丈夫です」とあつて満場頗る朗らかなになつたが、これなど人間井上を語るいゝ話だと思ひ、こゝに書いたわけである。

關西歌舞伎の中にあつて別格官幣社然としてゐる後に阪東壽三郎がある。それは義太夫を基調として育くまれた關西歌舞伎の人々に交つて藝の上で一致せない所謂水に油の存在はこの人である。

「豊田家のデンク」物なんか見てゐられ

ない」と散々にコキ下す人があるが、その人々は豊田家の藝をほんとうに解してゐない人なのだ、「東の左團次、西の壽三郎」と同じ藝風に生きて行くこの二人はたしかに新歌舞伎劇界の双璧だ、松竹がそれ故に左團次のやつたものを壽三郎にやらせて、ソツクリこの二人を双生児扱ひにしてゐるのも興行上得策には違ひない、だが自分らは左團次がやつたものを壽三郎にやらせてばかりゐるのはつまらないと思ふ、ひどい時には、いつかの「地獄變」のやうに二ヶ月もおくられて演らせるなどはおもしろくないことだ、それよりも曾ての第一劇場時代のやうな壽三郎得意の壇場が見たい、聞くところによると松竹ではちかく第一劇場を再興しやうといふ話があるさうだ、これはたしかによいことだ、それが爲めの二三の劇團の廢合は止むを得まい、それによつて壽三郎を關西歌舞伎から獨立させるべ

きだ。

あたかも東京新派から獨立した井上正夫がよい手本であり、その井上と一座をするのはある意味での皮肉ともいへる、井上同様の道を辿り、延若、梅玉、魁車らと離れて独自の藝に生きるべきだ、過日の「假名手本忠臣藏」の定九郎などはともかく、平右衛門に至つては壽三郎の

藝風をよく知る人はたとへその出来がどうあらうとも、あの人があれだけ義太夫物に熱演してゐたのは充分賞讃と同情に價するものがあつたと思ふ。
壽三郎よ！ 斷然この際獨立して、自己の藝をあくまで守り立てるべきではないか。

(十一・二・廿七)

保名禮讚

西尾福三郎

春爛漫の花舞臺と云ふにはやゝ寂しい味が勝ち過ぎてゐる。浮々としたのどかな中に何處やら物狂はし氣な焦燥と、そして堪らないやうな佗びしさ、春愁とでも形容したいやうなこの頃の季節感にピツタリと當嵌る菊五郎の保名。

これを清元深山櫻及兼樹振の振事として問題にするなら相當議論の餘地もあるが、六代目菊五郎の新舞踊保名として鑑賞する段になると、寔に野心兎菊五郎一代の傑作と評しても敢て過言ではない清元深山櫻及兼樹振を根底として出發



お・や・い

妹 脊 平 三

三月中座の井上正夫、樂屋でへんな顔……
「どうも、映畫の岡田サン竹久嬢舞合女優の村田サン、小太夫クンに阪東壽三郎サン——
こゝろ集まつては一體芝居をやるんですか、撮影をやるんですか——ネ——」

し乍ら凡ゆる無駄を省き去つた精髓の味
だけが舌に残る。心憎いと云はふか気が
利いたと云はふか、在來の古劇アレンヂ
もこゝまで達すれば甚だ結構である。

古い歌舞伎芝居を一旦バラ〜に解体
して、新しい理念でもつて再組織しやう
とする仕事は今日の劇團の重要な題目に
なつてゐて、從來から兎角云はれ乍らこ
の道一本に進んできた菊五郎の業蹟の内
この保名等は特記すべき六代目の代表作
であるかも知れない。

理窟はこれ位にして舞臺鑑賞に移るが
最初からこの種の物の例を破つて暗闇の
中で心戀を戀われ中そらになすな戀……
と延壽の獨吟をかきせる。そして徐ろに
明るくなると一面に菜の花の野原に小川
の流れ、遠く山迄続く菜畑と云つた背景
の中に、正面に只一本の若木の櫻、そし
て上手に清元の山台、山台の前に緋毛氈
を敷いて鼓方が只一人後から座につく事

になつてゐる。たゞそれだけの簡素な装
置である。すぐに保名の出になる。普通
だとして差金の蝶を舞はせ扇でそれを
追ひ乍ら保名がバタ〜と出てくるので
あるが、菊九郎のそれは飽く迄意表に出
るかの如くたゞ静々と花道を歩いて出る
拵らえ物の蝶は使はないが、七三で扇を
もつて蝶を追ふ仕事、その眼の動きに
亂れ飛ぶ胡蝶の有様を十二分に彷彿させ
る。

「何ちや戀人がそこへ行た、どれ〜エ
ーエ又嘘云ふか、わつけもない事云ふわ
やい」

の白があるだけで、後は殆んど振事計
りで終つてしまふ。

心酒事止めて語る夜は……の口説きか
ら心寝ぬを恨みの旅の空……の動きの
良さ。

二上りになつて心夜さの泊り……で
何時の間にか出てゐる鼓方が二三拍子鼓

モターイン・坂崎

大槻 たもつ

(1)

徳川消防隊長「どうだ坂崎君、あの娘を救つてそれを縁に結婚の申込とは」「?!」



尾花

を入れるだけで、後は又仕舞ひ迄清元の連吟許りである。

二度目の「悲しけれ……で絃に乗るやうな乗らぬやうなむつかしい足拍子を踏む。これは六拍子と云つて斯道での難物として傳えられてゐる。

「狂ひ亂れて伏し靜む……で小袖を冠つて崩折れるやう、に突伏してしまふとハラ／＼と櫻が散りかゝつて暮となる。

時間にしてザツと二十分をこそこの獨り舞ひ、何やらスカミたいなものだつたなどと云ふ人があれば以つての外、稀にはかうした灰汁の抜けた上品な藝の味をしみ／＼と味つてみる事だ。

たゞ案ずるのは、あの廣過ぎる歌舞伎座の大舞臺で、さらぬだに無理を感じ易い延壽太夫の咽喉と、そして菊五郎一人のみの外に利用すべき装置も道具もないこの一篇の眞の叙情味が、果して完全に所期の効果を収め得るだらうかと云ふ事

である。

時恰も踊りシーズンを前にして、斯道に志あると無いに拘らず、この一篇によつて啓發される所大なる物があるであらう。

例えば、長袴の裾捌きの鮮かさ、小袖の扱ひ、扇の持ち方等々、かつて浮かれ坊主の好技に酔はされた思ひ出を持つ人の見逃してはならない眼福である。

餘白があるからついでに衣裳の好みを記しておかう。

着附は淡紅色、長袴は古代紫地に蔦の縫取りの精好織、小袖は紫地に御殿模様、右の片肩を脱いだ胴着は水色地に露芝、鉢巻は古代紫の縮緬、扇は黒塗骨に金砂子の燻し、全部菊五郎自身の好みで、舞臺装置も亦かうした氣分に恰はしい情緒を描くに適した小村雪岱氏のデザインである。



(2)

彼女の夫「どうも消防手さん、家内を救つて頂いて申譯ございません」「?!」

俳優系譜餘錄

明治年間に物故した俳優達

紙魚庵

明治三年

○六代目市川團藏 十月廿二日、七十二才にて歿。

幼名昭世七代目團十郎の門弟となり、三藏・茂々太郎・白藏・九藏を経て嘉永五年六代目團藏を襲名す。

○三代目關三十郎 十二月十八日、六十六才にて歿。

藤間勘兵衛の子、始め市川團吉と云ひ、後五世市川八百藏となり天保十三年三代目關三十郎を襲名す。

明治六年

○五代目大谷廣治 二月一日、四十一才にて歿。四

世大谷友右衛門と同人。明治三年五月五代目大谷廣治を襲名す。

○五代目坂東三津五郎 五月十一日、廿八才にて歿。しうかの實子にて幼名吉彌。安政三年三津

五郎を襲名す。

○四代目坂東彦三郎 十一月十四日、七十四才にて歿。

市村座櫓元福智茂兵衛の子。後四代目彦三郎を襲名し、安政三年に至り、龜藏となる。

明治八年

○初代尾上菊次郎 六月十四日、六十二才にて歿。

最初片岡仁左衛門の門に入り次いで二世中村富十郎の弟子となり、天保六年江戸に下り、三世尾上菊五郎の門に入り菊次郎となる。

明治十年

○五代目坂東彦三郎 十月十三日、四十六才にて歿。

狂言作者冠二の弟にて初め竹三郎、安政二年五代目坂東彦三郎を襲名す。

明治十一年

○三代目澤村田之助 七月七日、三十四才にて歿。

五世澤村宗十郎の次男、初め由次郎曙山と號し近世女形の名人なり。

○五代目市川門之助 九月十二日、五十八才にて歿。江戸兩國青柳と云へる茶屋の俵にして五代目瀬川路考の門人なり。俳名新車。

明治十四年

○三代目中村翫雀 二月三日、四十一才にて歿。初代嵐璃珪の門才で狂藏と云ふ。文久三年三代目翫雀を襲名す。

○八代目岩井半四郎 二月十九日、七十四才にて歿。七代目半四郎の子、幼名を久次郎、天保三年衆三郎と改め、更に文久三年紫若となり、明治五年八代目半四郎を襲名す。

明治十八年

○初代實川延若 九月十八日歿年五十五才。初め初代實川延三郎の門に入延次と云ひ後、四代目芝翫の門に入つて延雀と名乗る、文久三年延若と改名。嵐璃寛、中村宗十郎と共に京阪三巨頭の一なり。

明治十九年

○四代目助高屋高助 二月二日歿。三代目高助の長男にて幼名を源平と呼び、後訥升と改め、更に四代目高助を襲名す。

明治二十二年

○中村宗十郎 十月六日、五十五才にて歿。尾州名古屋建具職の俵、初め中村歌女藏と云ふ。團十郎、菊五郎と共に明治年間を飾る名優なり。

明治二十六年

○坂東家橘 三月十八日、四十八才にて歿。十二世市村羽左衛門の三男にて幼名を竹松と云ひ、明治元年兄十三世羽左衛門、尾上菊五郎の名を繼ぎ、十四世羽左衛門を襲名し、市村座主となる後明治十七年十一月に至り、坂東彦三郎の死跡を嗣ぎて坂東家橘を名乗る。

明治二十七年

○四代目嵐璃寛 五月、五十八才にて歿。三代目の實子にて幼名和三郎後に徳三郎と云ふ。元治元年四代目を襲名す。

明治二十八年

○二代目中村雀右衛門 七月廿日、五十五才にて歿。幼名芝之助、初代雀右衛門の門弟にて慶應元年芝雀と改め、明治八年二代目雀右衛門を襲名す。

明治三十年

○十代目守田勘彌 八月廿日五十二才にて歿。九世勘彌の養子にて座元と俳優を兼ね、演劇の向上

を志したる斯界の恩人たり。

明治三十二年

○五代目芝翫 一月十六日、七十才にて歿。中村富四郎の子にして大阪に生れ、幼時四代目芝翫の養子となり、父と共に江戸に下り、天保十年福助と改名し、更らに萬延元年五代目芝翫を襲名す。

○尾上多賀之丞 六月廿六日、五十一才にて歿。

明治三十四年

○三代目中村富十郎 二月廿一日、四十三才にて歿。中村鶴助の門下、明治二十四年三代目富十郎を襲名す。

明治三十六年

○五代目尾上菊五郎 二月十八日、六十才にて歿。十二代目市村羽左衛門の次男にて幼名九郎右衛門と云ふ。世話狂言の名手にて團十郎と並び稱さる。

○中村霞仙 八月廿一日、三十八才にて歿。

○九代目市川團十郎 九月十三日、六十六才にて歿。七代目團十郎の五男。天保十三年八月河原崎權之助の養子となる。日本演劇史を飾る名優たり。

明治三十七年

○市川權十郎 三月廿七日、五十七才にて歿す。俳名鯉江。團、菊、左に次いで梨園の雄將と稱

されたる名優なるも明治四年情婦を殺して入獄。出獄後九世團十郎の門に入つて權十郎と名乗る。

○四代目市川左團次 八月七日、六十三才にて歿。

大阪の人、髮結床山中村清吉の二男なり。俳名薙升のち松蔦と云ふ。

明治四十四年

○七代目市川團藏 九月十二日、七十六才にて歿。

天保七年に生れ同十年市川九藏の養子となり銀藏と稱す。安政二年三代目九藏を名乗り、更に明治三十年に至り七代目團藏を襲名す。

◆本誌既載の俳優系譜

○松本幸四郎	昭和九年六月號
○河原崎權之助	七月號
○河原崎國太郎	七月號
○河原崎三右衛門	七月號
○嵐小六	九月號
○嵐雛助	九月號
○中村梅玉	昭和十年一月號
○尾上菊五郎	五月號
○守田勘彌	九月號



私の女房役と 劇團の變轉

(5)

都築文男

大正十四年十一月廿九日に河原君の葬儀があつて、翌日は松居松翁氏脚色演出の乃木劇の舞臺稽古、細を穿ち峻厳を極めた稽古振りには正しく翁獨特のものであらう、此時始めて鐵板を以て砲音を擬すのが利用されたのである。

小織の乃木將軍。喜多村の同夫人。都築の小笠原大佐の配役。東京では丁度左團次が乃木將軍を演じた直後、所謂東西の競演となつて人氣を呼んだ。乃木劇について後日、私と小織氏とが乃木寺建設の基金募集といふ美名に欺

かれて未だに祟つてゐる程、苦難をなめた。がこの話は次回に譲る。この乃木劇と瀬戸英一作「江戸紫」を以て翌十五年一月京都座を振出しに、名古屋、高松、岡山、姫路と巡業して歸阪する。

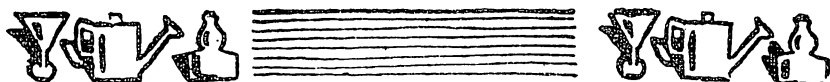
(この巡業中の挿話が面白いのだが過日本誌に一部掲載されたから省略す) 此年六月、至る所好評を博し、優越を感じ、意氣揚々たりし成美團最高スタツフを誇つた我が劇團も解散の止むなきに至つた。

短期興行の俵艶録を最後として喜多

村、小織が東上した爲だつた。

八月、英、藤村、柳、高田亘、波多故藤山秋美、東愛子等と自由座を起した。女房役が揃ひも揃つて小粒の英高田亘、東愛子、「山椒小粒でヒリリと辛い」これが亦大衆に歡呼を以て迎へられたのだから面白い。

狂言は晴衣。黒船。人非人。ルパンの8-8。地震(中村吉藏作)地上の人。戀慕愛人等。如何なる劇でも自由上演すると云ふ意味から自由座と銘打つた。劇團の賣物として狂言の替る度に小品陳列を四五種は必ず上演した。それが呼物の一つで非常なる好成績だつたけれど、八九兩月で不思議にも解散した。今考えても誠に惜しい劇團だつた。巡業などで其歳はお茶を濁した。恰も世は劍劇の黄金時代、新派は次第に影を潜め今や残雪を思はず不振、せめて新派道を保つ爲にもと、孤



立無援、樂天地に立籠り福井、木下の他に大井新太郎の加入を得、櫻吹雪、月魄で獨り新派の爲に氣を吐き可成りの大入を占めたが自分はふとした風邪から肺炎を併發して大阪醫科大學に入院して、大正天皇の御大葬當日にやつと退院した。

病後自宅で靜養中、四月十二日名古屋歌舞伎座から喜多村氏に招かれたのを契機に同年八月迄つと中京近郊を巡業し續けた。

八月大阪で偶然にも、井上、花柳、藤村、柳、梅島、英、小堀、武村、大矢、野澤、木村、熊谷、大井、木下、都築と新派俳優の大半が集結してゐたこの機會に一夕、某所で新派凋落を打開する座談會を催した。

席上、議論區々沸騰、結局井上氏は向上したい、少なくとも礫茂左衛門(當時浪花座上演中)程度の脚本を漁つ

てみたいといつた。併し觀衆が理論通りに受け入れて呉れるか否かと云ふ問題に到達すると井上氏は、觀衆の三分が理解して呉れたら、後の七分の觀衆は我々の舞臺によつて理解せしめ、向上に導きたいと語つた。

其時自分は、井上さんが向上を目指すなら自分は低下して見ようと反駁した。低下の深意は大衆を標準として大衆の嗜好に適應する脚本を上演する事である。井上氏が純文藝なら自分は大衆文藝に進まうと語つた。嗤ひ物かも知れないが、そして物質に不足を感じず、多少でも蓄財し、而して井上氏の高踏的演劇が成功した場合、自分は無給料で端役俳優でいゝ、それ程觀衆が高級ならば馳参じようとした。今考へれば我を張つたものだが、當時の日日新聞には、井上は上へ、都築は下へと題して肖像附で仰々しく載せられた

繁華街に近く……交通至便・閑雅な和洋室！

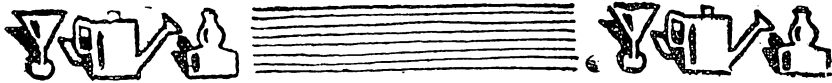
モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電話南四一四・四四一番

一宿
二圓
三圓
半額



ものだ。

此に大衆娯樂の旗ふりかざし、樂天
地を根城として、武村、野澤を兩腕と
して、女房役に毛利研二、若宮里路、
桃谷三千雄、花山秀夫等の變質女形連
オット失禮。若く美しい女形を網羅し
て「俠客忠臣藏」を通し狂言に猛暑に
もめげず、七月卅一日初日の蓋を開け
た。俄然自分の主張する大衆劇功を奏
し千日前を睥睨する螺旋階の殿堂も搖
かん許りの盛況振り。續いて、安藤對
馬守、常陸丸、増田上等兵、狂った御
家人、足輕の戀、沖・横川、安達元右
衛門、煙草屋喜八、業平金五郎、等の
大衆劇を上演して十月卅日迄續演した
十一月京都座、十二月神戸八千代座
と大衆劇の御目見得をなし、翌昭和三
年一月再び樂天地に歸り、魔劍の戯、
光は闇から、よ組の凱歌、戀千鳥、金
平まかり出で候。佐倉宗五郎等を以て

三月迄續演。三月廿日再び感冒で倒れ
た爲四月を休演し。五月には天満八千
代座へ、改革した都築一派で、大毎連

載「激流」を上演する運びとなつたが
保安課から不許可の達し、大平野虹と
自分が保安課長殿に面談し、全然不許
可の脚本を一部訂正で許して貰つた。
が二の替りがまた問題だ、有名な柳原

白蓮女史を東都より迎へて、女史作の
大阪日々新聞連載「戀歌ざんざ」を上
演する事になり女史に頼んでステーチ
に立つて挨拶して貰つた。

名にし負ふ豪華な筑紫銅御殿の女
王、街の噂のヒロインの嫵艶な容姿が
舞臺で觀られると云ふので、連日押す
な押すなの大盛況。

當時大衆劇と云ふ意味から、有名な
林不忘の大岡政談、丹下左膳を演す事
にした、新派の自分が純然たる劍戟、
隻眼隻手の丹下左膳を劍劇團より先鞭

シリウタオネバニ核結

... 科病柳花 ...

院医原藤

★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネバニ核結

淋病科コトイシ

淋病科コトイシ



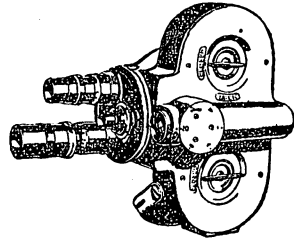
したのでから、如何に大衆劇に遇進したとは云ひ乍ら願みて怖ろしいやうな気がする。

五月廿三日から京都座で、其儘の狂言を上演する事になつたが、五條岩から白蓮女史を舞臺に立たしめるなら俳優鑑札を受けさせると高壓的な催促。我々には正しく晴天の霹靂。これには閉口して折角の超大入興行も一頓坐を來し、八日間で打上げ、卅日午後十一時に歸京される白蓮女史を御見送りする事になり、不振の新派の爲、御庇蔭御貢獻して頂いた事を深く感謝してお別れした。

へ待合はす人まだ見えぬ停車場の群集の中の淋しきひととき。白蓮

(次回完了)

フィルム



(早進グロダカリあに店ラメカ流一國全)
BELL & HOWELL CO. U. S. A

十六ミリ界の最高峰

未だ曾てフィルムカメラで影して失敗があつたか？
未だ曾てフィルムカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映画になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ費下のなされる事は唯それだけだ

天下第一品

カルマ酢

に標商の似類
小乞を意注御

店商田笹 瀬津根 店商田笹 屋古名



寺小屋「松王の型」

編輯部編

— 其の —

扮

装

髪は百日に力紙、病鉢巻は紫縮緬を結んで左に下げるのが古風、着物は黒地に雪持の松で羽織も對、白足袋に合草履、顔は白塗りに目張りを強くし、口を割り、青髭を濃くす、大は朱鞘で柄と下緒は白糸である。

「ヤールお待ちなされ」
病中の心で調子を伏せて云ふ

駕籠より出づる刀も杖
「憚りながら彼等とても……」

駕籠から出たつもりで大盡柱で立上り下緒を柄頭と共に握り、病人の心で前屈みの型で右手に刀をつき左手を懐ろに入れ、駕の棒先を廻つて前を出で、玄蕃に會釋して股を割つた形で高合引に掛ける。刀は矢張り右に突き左の手先きを柄頭にかけてゐる。

「暇下さるべしと……疏かには致されず」

疏かにはは調子を張つて云ふ

「助けて歸へる手もあること」

「百姓めら」

「面改めて……」

……戻して……

……くれるは」

退引ならぬ釘鏝……

玄蕃へ眼をやり「べしと」で咳入る。

(咳入る型には外に「助けて歸る」ですのと「面改めて」ですのと三通りあり)

左手を懐中に入れる。

玄蕃に云ふ腹、

刀をトンと軽く突く。

此處で咳入る場合は、顔を仰向け懐中の左手で口を覆ひ、右の刀をグツと體を寄せて咳入り

トンと強く刀を突き、左手を懐中に入れ

袖をかへす。

寺子の檢分まで首を下げて伏目である

……

「イヤ松王丸ま
あーづまあーづ」

待つ間程なく入り
来る兩人

「暫くは御容赦」
と立上るを松王丸
「ヤレその手は
喰はぬ」

「ぬ」は引いて
「身替りの質首」
氣を入れて腹を
さぐる様に云ふ

「後悔すな」
「机の敷が……倅
は如何致した」
「コリや今日初め
て寺イヤ寺参りし

る。

少し首を下げ合引を離れてから前と
同じく刀を杖に木戸の内に入り、斜
上手向きの形で歩んで来て思はず源
藏と左肩で當り、二足ほどヨロけて
後すさり源藏をキツと見る。こゝは
形の引張りだりでツケを打たない。
そして刀を左に取上げ源藏の後ろを
通つて上手にて玄蕃と高合引に腰を
かける。

源藏刀をついて膝を立てる

その動作にかぶせて、伏目でゐた顔
を上げ、右に引寄せてついてゐた刀
を立て、右肘を張り強く云ふ。

大きく云ひ放つ。

机を敷へてから戸浪に強く云ふ。

た子が……」

「何？ 何？……」

戸浪の台詞にか
むせて云ふ

「何を馬鹿なツ！

玄蕃もろ共ツツ立
上る
首打つ音

「無禮者めが」

玄蕃を盗み見る。

刀を台詞に合せてトントンと突き右
脇へ引寄せて脱む。
合引を離れる。

思はず下手へよろめき戸浪に右肩で
當り

正面を切つて大きく刀を真中に支き
右の手を胸に當てた形でグーイと見
得となる（彦三郎の型）

又は左の刀をトンと突き握つた右の
手を口の邊に上げて咳入り嘆きを紛
はす形を見せ、右の手先を額へ當て
首を下げる。

又は左手の刀を右寄りに支き右手を
頬杖の型でさまる。

（戸浪を叱るに『すさり居らう』で
叱る型もあり）

元の位置になほり合引に掛け右の手
先きで額を押へてゐるが、指の間か

（源藏の出）

堅唾を吐んでひかへるる

『ウフ、、、、、、、』

取巻きめされ』

畏つたと捕手の人敷………

女の念力………

ら源藏を注視してゐなければならぬ。

手をおろし

低く笑ふ

—註—笑ひに續く台詞は割つて云

ふのが正しい。

松『鐵札か』

玄『金札か』

松『地獄』

玄『極樂』

松『生死の境——家來衆源

藏夫婦を取巻きめさ

れ』

(家來衆から台詞早く)

刀を右に突きかへ左を柄頭へかけてゐる。

合引きを離れて左に刀を取り舞臺中

央に置かれた首桶を見乍ら向つて正

面となり下緒を延ばし乍ら刀を左脇

にジリジリ落し餘かに膝を突いて据

る。

……ためつ……

……すがめつ……

……

……窺ひ見て……

……

『首秀才の首に

(首は大きくくび
—に—と延す)

相違ない

相違ござらん

出かした

源藏

よく打つたな

蓋を取つて前へ置く

兩手を兩脇から徐ろに蓋の上へ右左

と手先きを突く

仰向き氣味に眼を見張り、眼を寄せ

グイーと看下す、源藏の苦忠と、我

子への愛に身をせめらるゝ腹藝

源藏に碎けた調子で云ふ

玄番に云ふ

首に向つて云ふ。直ぐ氣を變へ

ボンと蓋を閉ぢ

賞める心で右手上げて顫はせる。大

きく。後その手を右の股へ下し眼を

薄く閉ぢ、首を下げ、腰を落してホ

ツと息を吐く。

右の型付は杉摩阿彌氏と森ほのほ氏

の原稿に依り作成したものでありま

す。紙面の都合で全場の掲載が出来

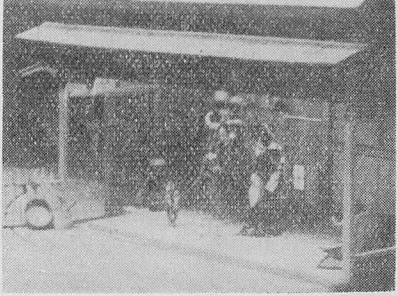
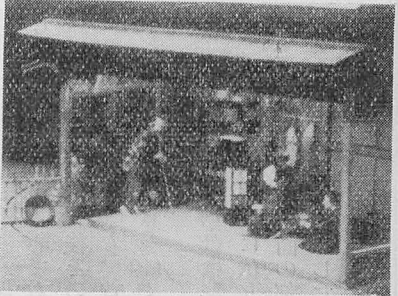
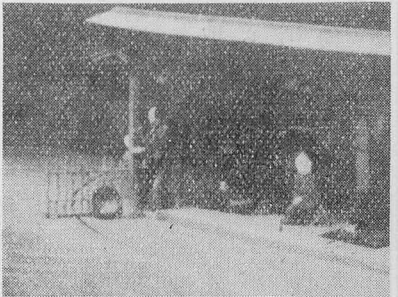
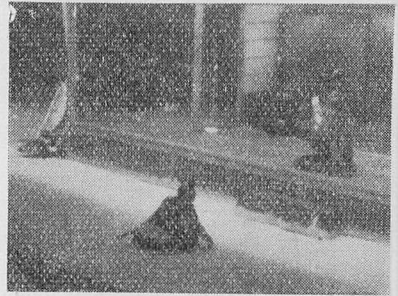
ませんでした。が來月號に引續いて連

載することに致しました。

◆ライカ行脚◆

・青年歌舞伎印象・

A・女鳴神——何處とはなしにピンと冴えない荒事である。これは名優の形の悪さが禍ひしてゐる。ことに鶴之助の絶間之助は氣の毒なほどで、松莚にも重厚さが足り



ない。左團次、松莚の鳴神を知るものに此的一幕は慘酷であつた。ストウリーにも中々近代的な主題が盛られてゐるのだが、こゝではそんな影は微塵だにない。

B・土屋主税——扇雀が鷹治郎の最も悪い癖のみを見せてゐる様な芝居で扇雀の出しものとして感心

しない。勘彌も力んでばかりゐて人情味に乏しい。此的一幕は主演級の人々よりも、反つて取巻きの入々、高麗五郎、成太郎などがいゝ芝居を見せる。

C・河原達引——晝の部では第一の観ものである。僕は不幸にして仁左の與次郎を知らないのをごの

程度似通つてゐるのかは知らないが六代目のやる與次郎よりも、矢張り義太夫狂言はかうした古いまゝの型で行つた方がいゝのではないかと思ふ。夜之部松王と共に我

當は立派に將來を約束させた。扇雀も土屋主税とは打つて變つた味を見せる。鶴之助も控え目にして

忠實。

五郎の蝙蝠安は第一の出色。

D・玄氏店——十六ミリ羽左衛門

E・寺小屋——昨年十一月南座で

の登場である。勘彌はセリフを羽

上演済にて既に各氏の批評が掲載

左に似させまいとする苦心が説へ

されたのでオミットする。

て面白い。松建は水々しくて色ツ

F・連獅子——荷の重い所作事。

ぽいが年増女の味に乏しいのは年

殊に鶴之助は温習會みたいだと誰

巧の足りないせいだらう。奥山の

かゞ云つた。後ジテになつてから

善七も邪魔にはならぬ出来。高麗

は、若さの元氣にまかせて大車輪

に首を振るが、報いらるゝところが妙い。

G・封印切——夜の部の歴巻。我

當と扇雀が一騎打をやる。そして

共に互角の勝負を見せて相譲らな

いのは面白い。扇雀もこの親譲り

なら立派なものだし、我當も永い

間東京で育つたにも拘らず、よく

上方の味を出し得たことは芝居上

手を裏書されるものとして譽めら

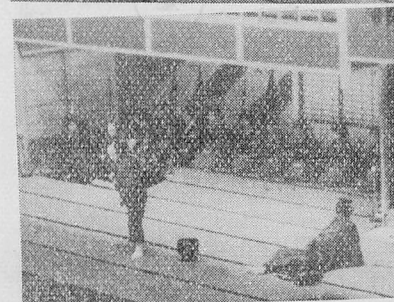
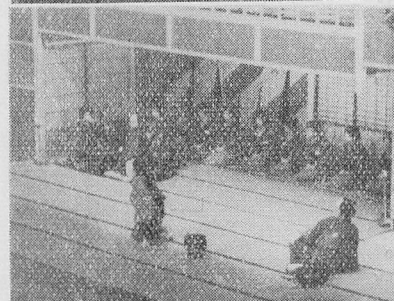
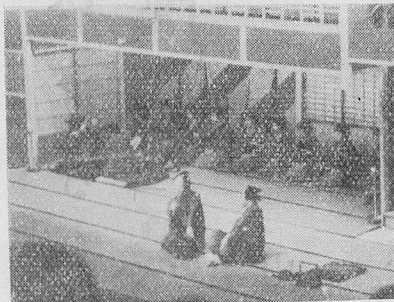
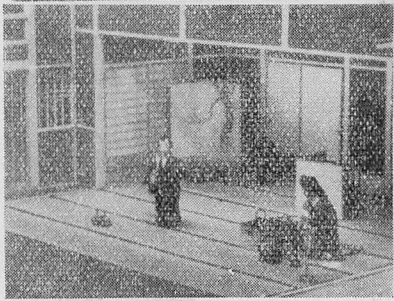
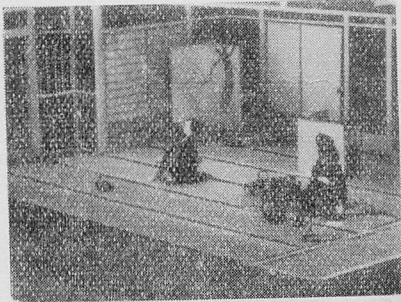
れてよい。成太郎の口跡眼をつぶ

つて閉いてゐると魁車をつくりな

のは争へないもの。此の幕で此の

人大當り。

(大橋孝一郎)



祇園館に於ける

「團十郎」と「鴈治郎」(1)

山川 聽雨



二月十三日の早曉京極の歌舞伎座が惜しくも無慘にも焼失して終ひました。この歌舞伎座と云ふのは眞に座名の示す如く歌舞伎とは因縁の深い劇場でありまして、最近こそズツと映畫劇場とはなつて

居りますが、その昔には、若き日の鴈治郎の活躍したることもあり、延若が未だ延二郎時代には久しく立籠つて人氣を博してゐたこともあつて所謂道場の小屋として好劇家に愛され、明治京都演劇史を飾る幾多のエピソードを藏してゐる劇場だつたのであります。而も此の歌舞伎座の建物は、明治二十三年に開場した祇園館（現在の花見小路一カの下に當る）の建物をごくに遷したと云ふ曰く付きのものであり、此の點だけでも此の劇場の焼失は中々に惜みても餘りある次第なので

あります。祇園館と云へば明治二十三年一月に同館で始めて團十郎と鴈治郎とが顔合せをした歴史的な光景を忘れることは出来ません。鴈治郎は此の機會に大いに團十郎に認められ、晴れの東京出演の契機を作つたので御座りました。此の月はあたかも成駒屋の一周忌に當つて居りますし、由緒ある劇場の焼失した痛惜の辭ともして、古い歌舞伎新報の記事から團・鴈顔合せの情景を抄録して、兩名優と祇園館即ち歌舞伎座とを偲ぶよすがともしたいと思ふのであります。



○明治廿二年十二月十四日第千七十六號
團十郎の西京行、同人は新年早々祇園詣と號して西京へ赴き一月下に歸京の心組なりとぞ。

○明治廿二年十二月十七日第千七十七號
祇園座の狂言 來る一月より團十郎が西京祇園座にて興行の狂言が一番目が一の谷の熊谷中幕が高時の田樂舞二番目が吃の又平切りが天津繪俳優は團十郎高福秀調鶴藏傳五郎勘五郎以下名題下數名にて看板までも東京風の趣向なれば追々關係の者は出立爲由なり萬端

は守田勘彌氏指揮なりといふ。

○明治廿二年十二月廿四日第千七十九號
團十郎出立 同人の出立は來る三十一日にて妻娘其外家族残らず同行爲由なり西京の旅は祇園の一方亭へ投宿の筈なりと云ふ。

○明治廿三年一月四日第千八十一號
京都祇園座 西京花見小路祇園座の興行は前號にも記せし通り一番目「二谷嫩軍記」三幕(序)蕨原の里(二)陣門と組打(三)陣屋中幕「娼妓誠長田忠孝」根の井上使の場(同)「北條九代名家功」高時天狗舞の場二番目「吃又平名畫譽」土佐將監邸の場引抜いて

大津繪の淨瑠璃となる、當興行は前號にも記せし如く悉皆東京風の演劇にして舊臘掲げたりし看板も又番附も從前の鳥居風齋藤蝶八氏の筆なり。

○同座開場 は七日の積りなれど大道具

ケンネン ト号



萬人愛好の 撰良車
國産品中の完壁 是非御愛用を

市内特約店ニアリ
株式会社 大澤商會
京都市三條通小橋西

小道具衣裳かつら及び樂屋向き一切を東京にて調進することなれば多分初日は十日頃なるべしとの噂さ右に付市川團十郎は去一日午後四時四十五分新橋發汽車にて出立し其餘の俳優並びに附屬の人々には本日同所の一番汽車に乘し發足せり團洲子は天津に所用あつて一日滯留して此の連の來るを待て共に入京する由なり。

○明治二十三年一月十一日第千八十三號 祇園館の乗込 西京へ赴きし團洲の一行は去る六日に祇園館に乘込みにて市中も餘程賑ひし由なり同日午後五時頃迄に七條榮壽軒に勢揃ひをなし六時三十分團十郎、福助は馬車その外は腕車にて惣勢百餘名烏丸通りを上り五條通り寺町を四條通りへ出祇園新地を廻り祇園館へ乗込み式終りて手打をなし目出度解散したりと又茶屋は皆三升と牡丹色暖簾を掛三升の積棧は津四樓より

贈りしものなりとぞ看板は矢張り西京風の繪にて奇麗に出來大道具は長谷川勘兵衛の引受なれば新調にて驚くばかりに立派なり當日の賑ひは近頃珍らしきことにて諸事守田勘彌氏の指揮なれば不都合なく濟たり開場式は明十二日にて初日は至十三日午前十一時より晝夜通しの開場とのことなり。

○番附役割 祇園館の役割は前號に聞得しまゝを記載せしが彼の地の通信員より番附を送り越したればその概略を左に掲ぐ番附は東京の通り鳥居風にて齋藤長八氏の筆なり三升の杵取り有りて名題其外とも勘定流なれば只劇場の違ふのみにて交り無し東京風の大番附なり。

初見參の手柄初め何かな御感に預らんと武藏の月毛に鞭打つて一二の谷へ馳付し熊谷直實久し振りの御目見

得に旅裝も取敢ず我子を思ふ一筋に夫の陣所へ馳付し女房相模須磨の浦邊のさゞ浪に音も妙なる青葉の笛君の御船に遅れじとたゞ嬉しさに馳付し平の敦盛(ト語りを置いて)一谷嫩軍記(中幕)意中謎忠義畫合一幕新歌舞伎十八番の内高時切はけいせい返魂香(淨瑠璃)六歌仙容彩(常盤津小文字太夫岸澤式佐)役割は傾城浮船實ハ盜賊袈裟太郎源九郎義經根の井大彌太忠親大佛陸奥守又平女房おとく喜撰法師(福助)無官大夫敦盛小次郎直家新宮小太郎光家僧正遍照在原業平大伴黒主(鷹治郎)女六部妙海實ハ畠山の室政子熊谷女房相模新宮後室千壽小野の小町(秀調)熊谷次郎直實北條入道高時吃の又平文屋の康秀(團十郎)等なり。

(つづく)

默阿彌物解題

世話垣鈍文

此の月の道頓堀では二ツの默阿彌狂言が上演されて居ります。浪花座の「十二時忠臣藏」と、歌舞伎座の「髮結新三」とがそうであります。で私は此の月は此の二ツの狂言に就いて解題を試みることに致しました。

「十二時忠臣藏」

本外題は「四十七刻忠筋計」と云ひまして明治四年十月に守田座で上演されましたのが初演であります。古劇復活を一つのスローガンとして居ります前進座の手に依つて復活上演されましたのは昭和七年十二月の新橋演舞場で實に約四十年振りの上演で御座いました。原作では九幕二十場からなる長篇ですが、此の度上演されます脚本は渥美清太郎氏が此の劇團の爲に改訂されたものに依るのであります。脚本の主題は義士討入の當日の明六ツから翌日の翌七ツまでを義士銘々傳に當嵌めて見せたものの筋のあらましを左に掲げることになります。

○五ツ半(午前八時)より四ツ半(十時半)まで

高田郡三郎は師直の屋敷の様子を探つてゐるが内山官左衛門の娘に見染められ望まれたが兄に断りにやる。しかし兄は断りかねて詰つて敵討の大事を洩したので、官左衛門の談判は郡三郎は婿入りを承知する。

○晝九ツ(正午)

愛妾お蘭の方と雪景色を眺めてゐた師直はお蘭が本家上杉の下屋敷へ移ることに反對するのでその氣になる

○晝九ツ半(○時半)より八ツ(二時)まで

お馴染の南部坂雪の別れ

○夕七ツ(午後四時)

身投げするお雪を五兩の金で助けた小山田庄左衛門はその娘を住居まで送つて来ると瘡が起つたので薬替りに酒を吞まされると、ツイ酔ッばらつて寝て終つた。

○暮六ツ(午後六時)より夜五ツ(八時)まで

小林平八郎は忠臣が玄宗を迷す

楊貴妃を刺す有様を夢に見て目を覺すと、清水大學が訪れて来て晝間の南部坂の一件を物語り敵討の心配無用と云ふが、小林は今見た夢と云ひ、お蘭の方は確かに間者だと云つて考へ込む。

○夜四ツ(午後十時)より曉九ツ(午前○時)まで

小山田庄左衛門が酒の酔から覺めると九ツの鐘がなる。南無三連かつたかと牛が淵まで来ると大事の去つた事を知つて切腹せんする娘は跡を追つて必死でとどめるので轉向して大小を濺へ投げ込み、身軽な町人となつて娘を抱きしめる。

一方、内山官左衛門宅では目出度く聳入りが済んだとき、山鹿流の討入太鼓が響いて来る。高田郡三郎は、これもしまつたと寢所を抜け出し切腹をする。花嫁は忠臣を大死させたと黒髪を切る。その時兄の元助が討入の様子を知らせに来る。

○夜九ツ(○時半)より明七ツ(午前四時)まで

討入の場だ。由良之助始め四十餘人の勝鬨が天地に轟く。

と云ふのが簡略な筋書です。因みに初演の配役は、高師直・由良之助・高田郡三郎が權之朗、小山田庄左衛門が仲藏、元助、清水大學が左圍次で御座いました。

「梅雨小袖昔八丈」(髮結新三)

申す迄もなく音羽屋親譲りの名品です。嘶春錦亭柳橋が得意とした白子屋政談を黙阿彌が脚色したものでありまして初演は明治六年六月の中村座で御座いました。原作では全部で四幕ですが、大詰に大岡越前守の裁判の件りを附したの、五代目が閻魔堂橋で殺されたきりでは心持が悪いと云ふ處から附加へられたと云ふことで、全場中では新三内の場が有名であります。初演の配役は新三が菊五郎、手代忠七が坂東家橋、お熊が岩井半四郎、源七と家主長兵衛が仲藏で、仲藏の長兵衛が逆も大出來だつたと年代記に見えて居ります。

女 形 か 女 優 か

川 上 利 一 郎

男が異性に扮して醸し出す女の世界、よしそれが自然に對する大きな反逆であり、怪奇的な事であっても、女形の存在は、世界に誇る、我が演劇の持つ大なる特長である。

慶長の頃、出雲のお國に依つて歌舞伎が創始せられたが、其の歌舞伎が風紀上の弊害の爲に、寛永年間に一切の女演藝と共に禁止の憂目に逢ひ、續いて起つた若衆歌舞伎を経て野郎歌舞伎となり、女の無い人生や社會が存在しない以上、其の必要に迫られて創案せられたのが女形なのである。だから其の發端に於ては極めて不自然なのであるが、歌舞伎四百年の歴史は、其の長時日の間絶えず經驗と研鑽を積んで、今日の歌舞伎に見る様な、素晴らしいメーキャップや、かつら、衣裳、型等を生むと共に、完成した女形を造り上げた譯である。

往年帝劇の女優等に依つて、歌舞伎の女形に代らんとした試みは

あつたが、完成した女形の前には一顧の價值だに見出されなかつた事實歌舞伎は、浮世繪に見る様な幻想の世界であつて、決して寫實のものではない。そして何んと皮肉にも、技巧を積んだ女形の藝域は、自然の女つまり女優より、より以上に美しくしい姿態を持つて居り凄艶なのである。其の濃艶なる情緒と云ひ、類魔的な色模様に至つては女形あつて始めて味は、れると云ふ事は、實際の舞臺が明らかにそれを物語つてゐるではないか。この場合の女優を想像する時は、女であると言ふ安っぽい寫實のみで、夢幻的な歌舞伎の醍醐味から、生々しい現實への悲しい顛落を意味するだけのものである。又形式美を尊重する歌舞伎にあつて、日本の女の貧弱な體軀が生理的に恵まれてゐない。以上の見地から、歌舞伎は矢張り女形でなければ、其の妙味は存在し得ない。だが今日、現在の歌舞伎の女形を展望して、餘りに其の寥々である

のに驚く。身體の自由を失つた歌右衛門、他に松蔭、時藏、新仁左等、若手では東の福助、松延、成太郎、國太郎等。此際若手連は女形の確乎たる地位を不動ならしめ得るか否か、歌舞伎の興廢を左右すると云ふ事を、お互に自覺して精進せられん事を熱望する。

こゝに面白い事に、歌舞伎の女形沸底に引かへ、新派では、喜多村、河合、花柳の三頭目が皆女形である事だ。大體新派は日清、日露戦役當時の非常時局に直面して國民が時代意識を痛切に感じ出した時、古典的な歌舞伎に對抗して生々しい現實の世界を見せる可く生れたものなのである。

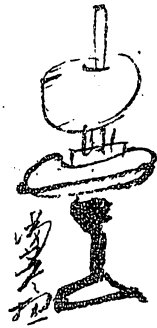
處が當時、確固たる思想的藝術的の根據を持ち合せなかつた爲に無意識の内に歌舞伎調を帯びる様になつた。新派狂言中の白眉と云はれる婦系圖等にしても、登場の人物の風俗こそ變れ、すつかり歌舞伎の形式を借用した人情劇なのである。喜多村、河合、花柳等の

女形は、歌舞伎の女形同様、斯か古典的な新派の中にあつては、寸分の陰も無い、素晴らしい藝の世界を持つてゐる。勿論この古典的な新派は、たとへ中途半端の誹謗があつても、喜多村、河合、花柳等の完全なる演技に依つて、今尙多くの觀衆を吸引する魅力を多分に持つてゐる。そして此れは歌舞伎の色彩を多分に帯びてゐるだけに矢張り女形のものだと思ふ。

だが時代は、一刻の猶豫も無く目まぐるしく進展してゐる。そして新派の觀衆は歌舞伎の模倣に、果していつ迄執着し得るやと云ふ疑問である。もつと新鮮なる現實のものを要求しつゝあるのであるだから時代の意識をよく認識して現實生活を活寫したものを、むしろ上演す可きである。だが此處で問題なのは、これからの新しい新派には、生々しい現實と云ふ上に於て、どうしても自然の女である女優でなければならぬ様に思へるからだ。河合、喜多村は既に

過去に於て華々しい新派全盛時代を歩んで来た人であつて、今日以後の新派から退却する事も出来るだらうが、將來の新派の頭目として目せられる花柳の女形としての今後の動向に就て、大きな興味がある。新劇座の公演等その眞摯なる熱意と努力には敬服する。だが裸體に遠くない洋装の女性が街頭に刻々數を増して行く時の流れを見る時、果して最後迄女形の地位を確保し得るかどうか。こゝに深刻なる現代劇と女形に就ての大きな苦惱がある譯である。折角樂き上げた自己の女形の地位を放棄して立役に轉向するか(一時不如歸の武男等上演した事はあつたが)或はクラシツクな境地にのみの安住を以て事足れりとするか。さもなくば一步突進んで、明朗な洋装の近代娘等の領域を征服して女形萬能を謳歌するか。今迄卑怯にも斯かる役柄に對しては應急の處置として女優を借用するのが常である。だが女形にしても女優にして

も、何れかその一方を以て上演す可きであつて、同一舞臺で此の兩者の混合程不愉快極まるものはないのである。生なりの女である女優と藝の技巧に依つて見せる女形との相違点を餘りにはつきり見せつけられる以外の他、何物をももたらさない。口跡の自然と不自然の對照等、此の場合藝の巧拙ごころの問題でないのである。新派では他に、先頃獨立旗擧した井上正夫や、又は藝術座の水谷八重子の一黨等があるが、これらは女形と云ふ問題に拘束されないだけに當事者の意圖如何によつては、先の花柳等の東京新派に比しては、新派の清新化は、より容易であらう。尙喜劇では曾我廻家五郎一座が女形を採用し、家庭劇がその豊富なる女優陣を大きな武器として活躍してゐるのも面白い對照である。とまれ、歌舞伎はその教養や修業の點に於て現在の環境では到底昔日の名女形を出す事は至難だろうし、新派は益々女優が進出して女形に代つてであらう事は、時代世相の反映として止むを得ぬところである。



紅筆余滴 次第不同

あの頃の、い

山口俊雄

私達が旅に出る。つまり旅興行です。始めて俳優になつた頃は兎に角癖しい事だ。今迄知らない所を方々と見物が出来てほんとうに良い商賣ですれエと皆から云はれたものでした。けれどやはり面白い事ばかりはないやうです。

始めて東京の芝居をはなれて田舎廻りに入つた時、一座は十五六人の俳優達で、おはやしや衣裳方等は皆役者の女房で、又それが女優にもなるのです。子供を二人も三人も連れて家もなければ何もない、只二日三日と打つて廻る芝居小屋が自分達の家だ。景氣でもよければ良いが、入りでも無ければお金はくれ

ないし、食へる物さへも満足にたべさせてもらへなくなるのですよと其の座に古くからゐる三十七八の女優兼おはやしさんの云つた事です。それは九州本線羽犬塚から山の方へ四五里も入つたある小さな町のきたない樂屋でした。寒い、冬の夜で、雪が朝から降つて

二三寸もつてゐる。おや、之じゃ明日も又雪で芝居は休みだなア：アア又か：：と其のおはやしさんの亭主はかすりの大きな柄の汚ないどてらを着て地酒をさもうまきうにちびり、とやつてゐる。まるで西郷隆盛が着るやうな着物だと思ひながら、私は其の人の若い頃の話を聞いてゐるうちにだん／＼と其の西郷さん醉がまはつてうさくトラになつて来た。お前はどこから来た。

東京から来たのか馬鹿野郎、お前なんか何が出来たのか、少しは芝居が出来るのか、この座へ来たらオレをたよつてゐればよい。安心してる、わかつたか。と云ひながらふところから何か出して、目の前にぐさりとつき

さしたのはつかのよごれた短刀だつた。其の腕には入墨がしてあつて、たくさんの傷あとがみえたのです。之でも役者かと私はおどろいて、じつと、其の顔をみてゐました。じゃこの座に入つた印に手前一升買へと云ふ事に

なり、とう／＼私は雪降りの中を買ひにやらされたのです。

やつと自分がれる汚ない樂屋に来てみれば戸のすき間からは小雪が降りこんでフトンには實に汚なく、中には綿も何も入つてゐないのでせう。せんべいぶとんと云ふやつです。枕は木の枕です。とてもぬれたものではない。壁と障子、どこもこゝも落書で一ぱいだ。

何々會一行：：何年何月：：大入満員：：「牛と狐の泣き別れ、モウ：：コンコン」等と書いてあつた。なる程と思ひました。

夜があけたら思つた通り芝居はお休み。朝めしは澤庵少しとこは人だけなり。金はなしその一日もこの芝居小屋にとち込められた。旅のつらき、思出。

旅順の想ひ出

藤村秀夫

上山草人氏と一座して、遠く其の頃は長春（今は新京までも）、復活を持つて巡業した時の想ひ出である。私の役は、カチニシヤを調べる裁判官であつた。

其所でも婦人が観客層の大部分を占めてゐたカチニシヤが罪に問はれて、裁かれるあ

たりは、殆んど號泣に近い迄の聲を出して泣くのである。勿論、原作者トルストイを生んだロシア本國の近接地である丈に國狀も内地とは異つてゐるではあらうが、それは内地のそれとは比較にならない程の感動振りであつた。私はカチューシャの哀れな生涯を、身につまされてこんなに泣くのであらうかと考へ、遠く故國を離れて來てゐる人々の事を想ひ、一入深い旅愁と感慨を覺ゆるのであつた。

それから此の一座が更に巡演して旅順に來てから幾日か過ぎて、私も一人の女を知つた。今から廿數年前の頃は私も血氣旺んな青年であつた。

どうせ私は渡り鳥、やがて別れなければならぬのだと知り乍ら旅順での明暮は私の心を楽しいものにしてくれた。

そして數日が慌しく流れて、愈々別れの言葉を変はさなければならぬ時が來た。

「では、もうこれつきりお逢ひする事が出來ません。御機嫌よう、女は私の手を握つてこう言つた。『屹度何時か、又お逢ひする事が出來ますわね、それを楽しみにしてゐますわ』」

大體の女はこう言つてくれるかも知れないけれどその女は再び相逢ふ事の出來ない事を知つてゐるのだ。

總てを知つた諦めは、一種の徳性だと或る偉い人が言つた。

私はその女から何かしら力強いものを感じるのであつた。

旅順の港も、忠靈塔も、街も、山も、一切は眞黒な夜のとばりに深々と包まれてゐた：：：『さようなら』寂しくこう言つてみつめた女の顔が闇の中に、ポツカリと白く何時迄も私の腦裡に浮んでゐた。

十二時忠臣藏

中村翫右衛門

明治四十年十月、當時の守田座に河竹默阿彌翁が書留したもので(作者五十六歳の時その主役のほとんゞは團十郎、左團次で演じてゐます。

錦繪等にも、南部坂の場で、團十郎の大星に對して、左團次の清水大角が、明治維新當時流行の白のシャツに着付、黒ラシヤのブツサキ羽織、講府町と云ふカツラの傘をさしてゐるのを見ました。亦南部坂で效果に蔭でピーヒヤラドンドコンの鳴物を使つたとも聞きました。十二時間の内に事件の進展を取入れ時計を出して場面／＼に時間經過を示す

等、當時の新趣向だつたと思ひます。

特に小山田變心の場は、先代左團次の當り役として、丸橋忠彌以來の好評を得たものだそうで、現在關西では豊田屋さんが出物として私も以前東京松竹座で拜見した事があります。それに南部坂は、特に故成駒屋さんの名技が眼に残つてゐる御當地での上演を一層私共に一生懸命の覺悟をより強く感じさせます。今度は原作の意圖を充分生かして、然し時間的には出来るだけ、テンポを早く一幕／＼と云ふより全體を通じた筋の運びと、場面の轉換に主を置いた渥美先生の演出と鳥居先生の装置は、きつと皆さんを満足させる凝つた舞臺を御覽に入れると思ひます。

こうした忠臣藏の紹介は他に眞似のない前進座の一つの特徴だと存じます。演技に不満の點も多々ある事と御座いますが東京上演の際も大變好評を得たものであり唯座員一同熱と力で演じる覺悟です。「熱と力ぢや、藝ではない」と云ふ事も考へられますが、その熱と力の道を通り完成された技術への道に達しるのだと思ひます。それは相當の年輩に達した時で、まだ私達は若いのです。

熱と力、張り切つた舞臺

眞正面から熱と力でブツ、かります。



名優あれやこれや譚

(二)

日比繁次郎

今月はちよつと方向轉換を試みるとして、喜劇の澁谷天外の話に移つて見やう。澁谷天外と云つても現在の家庭劇の天外ではなくそのお父さんの天外のことである。勿論初代天外は既に此世を去つて既に二十年近くもの星霜を経てゐるし、いま私が話そうとする事柄はその天外君が新しい喜劇の旗を翻へした樂天會創立當時のことだから、又十五年も遡つてのことなのである。そんな古い話を引つ張り出して何うしやうと云ふのだとお叱りを受けては困るが、此稿の標題の示すやうに天外又名優に成り得んとした若

き天才の一人であると私は確信するからである。死んだのが多分三十七八歳の壯年時であつて、鋭い意氣込みと若々しい情熱の燃え盛つてゐる最中であつたが、惜しむべし夭折してしまつたのであるが彼れに今暫らくの年數を假したならば、恐らくはいまの曾我廼家と共に異常な發展を遂げてゐたに違ひない。かうした天才的な現はれはいまの家庭劇の天外君にも多分に享け容れられてゐるが、故人天外がまだ徳家團治と名乗つて大阪から京都の大虎座へ移つた頃のこと、大虎座と云へば其頃新京極で唯一の喜劇専門の常

劇場であつたが、こゝには既に舊大阪の俄の栗亭新玉、栗亭東玉などいふ先輩が地盤を固めてゐたので、新らしく加入した團治などは、まだ誰れにも顧みられてゐない若い後輩の一人に過ぎなかつた。その頃夏場の例として、人氣寄せの手段に俄相撲といふのを催して、見物から穴を見出させることとし、後輩の技藝奨励にもしてゐた。舞臺の左右へ一人づつ座を占めると正面へ行司が現はれ、左右が一題づゝの落語のやうなものを話し行司が判断して話の好いのを勝ちとするこの關取の一人にやはり團治の天外も現

はれたことがある、行司は座頭格の東玉であつたが、双方の話が濟むと行司は對手に團扇を上げて團治の負けとなつた。

ところが普通ならば此處で双方の關取はお客に一體してすぐ樂屋へ引取るのであるが、負けられた方の團治が動かない、さうして滔々と辯じ立て、行司の東玉に抗議を申込んだ。私は遺憾ながら此時の話を記臆してゐないので、何方が是であり何方が非であつたかを知らないのであるが、此時の團治は非常な意氣込みで、對手の話も古ければ行司の判斷も古いと云つて何うしても自分の負けを承知しなかつたので、遂に本意氣に東玉との間に口論が起つた、東玉は若い分際でお客の前をも憚らず生意氣千萬だ、愛嬌商賣はモツと愛嬌らしく物を云へ、と遂に眞つ赤になつて團治を罵つた。瘡せ細つた團治は満面に青筋を立て、尙ほも己れの主張

を枉げず頑として動かかなかつたので止むを得ず幕を引いて其日の相撲はそれで中止になつたが、私は見物の一人として此成行は何うなるだらうと其夜家へ歸つてからも心配したことがあつたが、理非は兎も角當時同じ年輩の見物の一人として私は若い團治が藝の上での論争として、先輩でも座頭でも頓着なく滔々として所信を述べ立て一步も譲らず頑張り通した其意氣を壯とし、而かも蒼白い顔面を緊張して物凄い顔で先輩を魄み通してゐた悲愴な團治に馬鹿に同情したものであつた。

そんなことがあつてから、一年ばかり経た頃、同じ新京極の福井座で樂天會が旗上げをした、團治の天外と中嶋樂翁が結んで先輩の粟亭新玉が上置のやうになつてゐた。私は團治の名を見て『果せるかな』と思つた。天才は遂に萌芽を現は

したので。創立當初の樂天會は殆んど見物は來なかつた。而かも舞臺人の努力は溢れてゐた。樂屋内から出て座員達が代る／＼棧敷裏へ現はれて見物の頭敷を眺めてゐるのが妙に淋しかつた。

新しい物が殻を破つて出る時、いつもかうした胸を打つやうな光景に出會はすものだ、私はいつまでも此光景を忘れることが出来ない。後年機會があつたら此時の相撲の話の内容は何んなものだつたか聞いて置かうと思つてゐたが遂にそれも聞かないうちに彼れは此世を去つてしまつたのである。

道頓堀の

年極め御購讀を

お申込は編輯部へ……………

一ケ年 三圓三十錢

編輯後記 村上 勝

※陽春——花に魁けての本誌特輯三月號でござります。先づ山本有三先生が御病中にも關らず玉稿を寄せられ、更に岡本先生が渝らぬ御厚情によつて作談を寄せられたのは編輯者として此上もない喜びです。

※高安先生はじめ、諸先生の劇談は本誌ならでのものばかりです。その他都築文男氏の續きもの、日比繁次郎氏の「名優あれやこれや譚」など、興趣ある讀特揃ひです。

※尙今月の「作家訪門記」は中井泰孝先生で原稿は己に手許に調つてゐるのですが、都合上四月に掲載することに致しました。中井先生並に讀者に御詫び申し上げます。

※別項の通り大橋氏が、京都支部を擔當することになりました。どうぞよろしく。

(村上)

×此の月から松本氏の御斡旋で編輯部京都支部を擔當致すことになりました。非才よくその責を果すことは出来ませぬが力一パイ

の努力を惜まぬつもりで御座ります。京都在住の諸先生達には何卒絶大の御教示と鞭撻と、そして特により以上本誌に對して御懇切なる御支持を賜りまする様に幾重にもお願い申し上げます。

×先づ本號からは色々な讀物を豊富に致しました。明治時代に出版された貴重な文獻は今日容易に入手することは出来ませぬ。それ等の内から取捨撰擇して掲載することも若い演劇ファンの方々に親切な方法と考へたのであります。

×また今後は讀者の爲に出来得る限り頁を捉供致しまして、華々しい筆論戦で紙面を活氣付けたいと思つて居ります。古い云ひ草ですが、皆様の道頓堀を一つのモットーにしたい所存です。

×その魁けとして本號には當市の川上氏が御投稿下さいました。これを火蓋として讀者諸賢の御投稿を待つこと切です。

(京都・大橋孝一郎)

昭和十一年三月一日發行

月刊『道頓堀』第十一年
第百十四號

◇郵代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の幣に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市中區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和十一年三月一日印刷
昭和十一年三月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店

發行者 島江 貞也
共同編輯 山本 泰三

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

編輯 京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始礎 辻と添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

昇竜特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大坂 發賣元 朝日堂株式會社

大坂 本舖 中田スキナ屋謹製



昭和十一年十月廿五日第三種郵便物認可
 昭和十一年三月二十九日發行
 通巻第百十三輯 第十一号二月號

「道頓堀」 第百十三輯 第十一年 三月號



固形浅田飴

雛壇ひなだんに

供そなへても見るみ

浅田飴あさだあめ

俗に奈良の水取までは寒いと云ひます。
 氣候の替り時こそ、風邪引かぬ御用心が
 肝要です。
 咽喉の保護には有名な咳止美音劑
 浅田飴が有ります。

本舖 東京 大阪 堀内伊太郎

感冒の人に
 咳の出る人に
 咽喉の悪い人に
 聲を使ふ人に
 觀劇に
 旅行に
 放送に
 講演に
 溫習會に
 人混中に
 煙草代用に

(全國到る處の藥店にあり)

一部 金參拾錢